

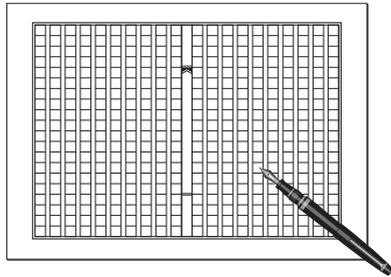
ふるさと
秋田
文学賞



Vol. 12

受賞作品集

第12回ふるさと秋田文学賞
受賞作品集



刊行に当たって

本県は、平成二十二年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成二十六年には十一月一日を「県民読書の日」と定めました。

この記念事業として創設された「ふるさと秋田文学賞」は、国内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることを狙いとし、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材に描かれた小説やエッセイから優れた作品を選考し授与しているものです。

第十二回を迎えた今年度は、全国から過去最多の百八十七編の御応募をいただきました。作品を応募された皆様には心から感謝申し上げますとともに、多くの皆様に親しんでいただけるとして定着していることを誠にうれしく感じております。

小説の部には、方言の用い方や脇役の巧みな配置などに工夫が凝らされた、個性的で獨創性に富んだ作品が目立ちました。また、エッセイ・紀行文の部には、ふるさとの記憶の描写に当時の自らの感情を投影するなど、秋田で過ごした実体験をもとに描かれた作品が数多く寄せられました。

読書には、他者の考え方や価値観に触れることにより想像力を養い、視野を広げるなど、豊かな人間性を育むための大切な役割が期待されます。

今後、県民の皆様が、日々の暮らしの中で読書に親しみ、じっくりと活字に触れ、心豊かな人生を送ることができるよう、読書活動の推進に力を注いでまいります。

結びに、創設以来「ふるさと秋田文学賞」の選考委員をお務めいただいた内館牧子様のご逝去に際し、これまでの御指導に深く感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

令和八年二月

目次

第12回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

へなが

受賞者のことば

高山

准
・
・
・
7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

流木と悪魔

受賞者のことば

位ノ花

薫
・
・
・
47

◇ふるさと秋田文学賞佳作

ピユア

受賞者のことば

雛・・・・・・・・・・・・・89

第12回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

該当作なし

◇ふるさと秋田文学賞佳作

フラッシュバック

受賞者のことば

畠山ルミ子・・・・・・・・・・・・・123

第12回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

へなが

高山 准・作

へ
な
が

その日私は鈴ばあの葬式に向かう新幹線の中で、鈴ばあの言葉を思い出していた。
へへながまがつてもそばさいでける人といっしょになれ

鈴ばあは母方の祖母だ。六歳まで母の実家に住んでいた一人っ子の私にとって、鈴ばあは一番の遊び相手だった。お手玉やおはじき、お絵描きに昔っこ。鈴ばあはいつもつきつきりで、小さい私の面倒を見てくれた。

私と両親が実家を出て隣町に住み始めてからも、鈴ばあんちには足しげく通った。鈴ばあは一人で暮らすには大きすぎる家で、いつ遊びに行っても、シャキシャキと動き回って暮らしていた。元気で、優しく、ひまわりみたいな笑顔でいつも笑っている。それが鈴ばあだった。

一度、両親とひどい喧嘩をして、鈴ばあんちに家出をしたことがある。高校生の時だった。ここに来たことは内緒にして、と頼んだのに、いつの間にか鈴ばあは両親に連絡を入れていて「気が済むまでいだっていかな」と言ってくれた。結局学校も一週間休んで、私はその間、鈴ばあと二人で過ごした。鈴ばあはその頃近所のお弁当屋さんを手伝いに行っていたけれど、昼には私のためにわざわざそのお店のお弁当を持って帰ってきてくれて、一緒にご飯を食べてくれた。もうアラサーと呼べる年齢になってしまったけれど、今でもその一週間のことはつきりと思い出せる。

そんな鈴ばあが、死んでしまった。

「もつと会いにいけていたらなあ」

段々と緑が増えていく景色を車窓から眺めながら、私の声はため息に交じって消えた。大学進学で関東に出て、就職もそのまま東京に。一応お盆とお正月は帰っていたけれど、コロナ禍が挟まって、何年か帰省できない年が続いた。その間、鈴ばあは肺が弱って、入院しがちになった。

本当は会いに行きたかった。だけど、連日の報道やSNSで、コロナ感染者の爆発的な増加を知り、関東から地方へ帰省することへの議論を見た。ほとんどの人たちはそれに反対していた。

それから、私の所為で鈴ばあに何かあったら……と思ったら、会いに行くという選択肢は消えていた。両親にも、周りに何か言われてしまっただろうから来ない方がいいと言われた。今は耐える時、というのが日本全体のムードとしてあった。

それから数年。なんとなく世間が日常を取り戻したように思えて、やつとこのお盆休みは会いに行ける。やつと、やつと。そう思った矢先、鈴ばあが亡くなったという知らせがあった。それで今、私はひとり秋田新幹線に乗っている。

鈴ばあ。生きているうちにもう一度会いたかったよ。鈴ばあ。

昨日鈴ばあの訃報を聞いて、すぐ事務的に忌引きの手続きをして、帰宅して荷物をまとめた。会

社で勤務中に電話を受け取ってから、涙はまだ一度も出ていない。同僚や上司が心配してくれるのにも、うわの空で返事をしてしまった。

いまだに鈴ばあの死を現実とは信じられない私がいる。嘘じゃないだろうかと思いつつも、私の身体はものすごい速度で秋田へと運ばれていく。

ピロン、とメッセージアプリの通知音が鳴る。誰だろうと思つてスマホを手にとると、隆志だった。
〈俺のくつしたどこ〉

気の抜けたメッセージに、さつきとは違うため息が出る。

〈チェストの一番上だよ〉

すぐに既読になった。少し待つてみるが返信もなく、画面は暗くなる。

隆志とは大学卒業と同時に同棲を始めた。大学サークルの一個下の後輩で、気が付いた時には付き合っていた。今、彼はプロゲーマーになると言つて、動画投稿サイトで配信業をしている。配信業と言えば聞こえはいいけれど収入はほとんどなく、私のお給料で何とか二人暮らしている状態だ。配信用の機材だつてすべて私を買つてあげて、配信部屋にするのだと、勝手にウォークインクローゼットに収納していた私の服を全部出された時も、受け入れた。

でも、ありがたいの言葉の一つもなかった。

「背中がまがつてもそばにいてくれる人と一緒に、か……」
思わず上を見上げると、車内の明るさがいやに眩しかった。

*

「いぐ来たね、亜紀。大変だったべ」

「ううん、そうでもないよ。忌引きはもらえたし」

「んだって、忙しかった」

「大丈夫。職場の人たちはみんなやさしいから」

駅に着くと母が出迎えてくれた。最後に会ったのはコロナ禍前で、記憶の中の母よりも少し小さくなったように感じる。元気そうな声だったけれど、きつと無理をしているのだとわかった。実の親が亡くなってしまったのだから、当然だ。

そのまま車に乗って、母の運転で鈴ばあちに向かう。

「鈴ばあさあ、前日までは元気だったの。入院してらったんだ。その日の夜、急にわりぐなつてねえ」
「……そうだったんだ」

母はかみしめるように続ける。

「その時は様子見てみましょうって言われだんだども、朝になったらもう息してなくて」

「……」

ぐず、と鼻をすすする音。

「でも、亜紀が来てけでいがった。鈴ばあ、亜紀さ会いでがったがら」

「……ごめん」

「なんもだよお。都会で忙しぐしてると、鈴ばあもわがってらったべった」

鈴ばあ、本当に死んでしまったんだ。膝の上に置いたこぶしをぎゅっと握る。固く握られた両手を見て、ああ、今私秋田にいるんだ、と思った。

ピロン。

〈爪切らないんだけど〉

「あや、隆志くん？」

「あー、うん。まあ……」

〈テレビ下の右の引き出しにあるよ〉

既読。

返信はない。

画面が消える。

「隆志くんも来れだらいがったけど、仕事、忙しんだば仕方ねな」

「うん……。紹介出来たらよかったんだけどね」

配信業に疎い両親には、隆志のことを会社員だと説明している。両親は一度も隆志に会ったことはなかった。何度か会わせようとしたことはある。でもそのたびに、隆志は何かと理由をつけて、会おうとしなかった。

昨日訃報を受け取った時、私はもちろんすぐに隆志に連絡を入れた。

〈母方の祖母が亡くなっちゃったって〉

〈忌引きをもらって、明日実家に帰る〉

〈隆志も一緒に来てほしい〉

当然のように、既読無視だった。

帰宅して私が最初にかけられた言葉は一言。「明日からウーバー頼むから、お金」だった。

「大変だねが、二人で暮らすなは」

「え？」

「お母さんは結婚した時、鈴ばあがいて、お父さんがいて。なんでも二人さ頼って。んだども亜紀たちは二人だから、協力しあわねば大変だべ。ただでさえ都会で生きでがねばだめなんだもの」
何も、返せなかった。

「いぐやってるな、ど思うよ。二人で力合わせで、いぐ頑張ってる。いっつもお父さんと話しでるんだ。亜紀も隆志くんも、えらいって」
二人で力を、合わせて。

暗くなった画面をまた開くと、やっぱり返信はなかった。
「ありがと……」
胸の奥が痛んで、そう返すのがやっとだった。

*

「もうみんな酔っ払ってると思う」

「みんな？」

「近所の人みーんな来てけだなしや。通夜さ」

鈴ばあんちの玄関前に車を停める。もう日が暮れている。都会の夜の明るさに慣れていた私には、その街灯すらない真つ暗な夜が久しぶりだった。

「亜紀連れて来たよー」

「おお、亜紀。いぐ来てけたなあ、忙しいなさ」

玄関を開けると、頬を赤くした父。それから、がやがやと話し声。お酒の匂い。

こちらに気づいた人たちが、口々に「おお、亜紀ちゃん！」「久しぶりだな」「あや、きれいになって」「こんたに小せがったのに」等々声を上げる。知っている顔も、知らない顔もあった。幼い頃に会ったつきりの人たち。やっぱり、記憶よりもずいぶん歳をとっていた。

「こんばんは。お久しぶりです」

「まんずまんず亜紀ちゃん、鈴ばあの顔見てけれ」

そう促され、手を洗ってから仏間へ向かった。昔住んでいた時は仏間の方は暗くて湿っぽくて、あまりそこにいたくなかったな、と思い出す。

仏間には電気がついていた。煌々と照らされた、白い柩。窓の部分が開けられていて、そこを覗くと。

「眠ってるみでだしやなあ」

私の後ろについてきた母がそう言った。本当に、眠っているみたいだった。

「鈴ば、」

「ずっと入院してで、苦しかったから、ゆっくり休んでらんだ」

気が付くと父も私の隣にいて、優しく柩を撫でた。

しわくちゃの、ちいさな顔。今にも起きて「おお、あぎ。いぐ来てけだ。まずねまれ」と笑ってくれそうな、鈴ばあの優しい顔。

「鈴ばあ、鈴ばあ」

あふれてきた涙をぬぐう。母も父も、何も言わずに背中を撫でてくれた。あたたかかった。

*

「せばよ、亜紀ちゃんは今東京さ？」

「そうです。事務の仕事をしていて」

通夜振舞いの輪に交ざると、隣に座っていたおばあさんに話しかけられた。確か鈴ばあんちの三軒隣のおばあさんだ。

「東京ってば幸蔵んどこの、なんてったつけが、亜紀ちゃんぐれの……」

「……凜太くん？　ですか？」

「そだそだ、リンちゃんだ。リンちゃんも東京さいつてで、嫁っこ貰って、子供も二人生まれたどつて」
凜太は私の幼馴染だ。鈴ばあんちに住んでいた頃は少しか会ったことはなかったけれど、小学校と中学校が同じで、隣町ということもあって小学校低学年まではほとんど毎日遊ぶような仲だった。高校で離れてからも、母を経由して彼の様子は伝わってきたけれど、大学に入ってからのはわからない。まさか結婚して、子供も生まれていたなんて。当たり前だけれど、もうお互い自立した大人なのだ。

「んだどもしゃあ、幸蔵も自業自得でねが」

「んだよなあ、あんた性格だもの。しかだねつて言えば、んだんだども……」

おばあさんが隣に座るおばあさんと会話を始めたので、凜太の詳しい話は訊けなかった。幸蔵はおそらく凜太のじいちゃんの名前だろう。

凜太のじいちゃんの記憶はうっすらだけど残っている。いつも意地悪で、何かあるとすぐ怒鳴ってきた。それこそ、「あの鈴どこのわらし！」と、怒鳴るのだ。その言い方で、鈴ばあのもも私のこと嫌っているのだと思った。だから、私は当時凜太のじいちゃんのことを大っ嫌いだった。

「……？ あれ？ というか凜太のじいちゃんは来てないんですね」

私がそう尋ねると、二人は顔を見合わせて、少し黙った。

「え、入院とかですか？」

「……んにゃ、あれなばうるせっくれ、ピンピンしてる」

「んだ。だども、鈴ちゃんがねぐなつたつて聞いて、どでんして、きやつて」

「鈴ちゃんのごと好きだとは知ってらつたけど、まさかきやるどは思わねっけ」

「え？」

凜太のじいちゃんが、鈴ばあのことを好き？ 何かの間違いじゃないだろうか。でも、びっくりして倒れた、って、どういうこと？

「え、それって、どういう……」

ピロン。

〈ゴミ袋どこ〉

〈生ごみのやつじゃなくて、資源ごみの方〉

困惑している私に気づかず、おばあさんたちの話題は別のことへと移っていく。
ピロン。

〈へかバスタオルどこ〉

〈返信まだ〉

ピロン。

〈困ってんだけど〉

次々と送られてくるメッセージを、私はしばらくの間、ぼーっと眺めていた。慌てて返信をするまで、ほとんど毎秒、罵倒のようなメッセージが続いた。

結局その話は掘り返されることもなく通夜振舞いは終わって、近所の人たちは「せば、明日」と、各々帰っていった。

その日は鈴ばあんちに泊まった。両親も泊まると言うし、隣町の家に帰って一人で寝るよりも、鈴ばあと一緒にいたい。少しでも、鈴ばあのそばにいたかった。

また柩の中を覗いてみる。やつぱり、寝ているみたいだ。

起きてよ、鈴ばあ。またいつもみたいに、「あぎ」って、呼んでよ。

寝る前に母に訊いてみた。凛太のじいちゃんが倒れたって？

「ああ、そうだなしゃ。鈴ばあのごど聞いた途端、びっくりして倒れちゃったんだど。今は家で安静にしてるらしいけど……明日は来るって」

「そうなんだ。……ねえ、鈴ばあのこと好きだ、って」

「ああ、その話」

言つてねがったね。と、母は話し始める。それはこんな話だった。

——鈴ばあは母を産んだ後すぐ、夫（つまり私のおじいちゃんだ）を病気で亡くした。それまで実家を出て県外で暮らしていた鈴ばあは、幼い母を連れて秋田に戻ってきた。まだ若い鈴ばあには縁談がいくつか持ち込まれたが、未亡人でまだ歩けもしない子を連れてくる鈴ばあはそれをすべて断つた。

「断らねたって、あつちが断られたつたと思つて笑つてらつたけどね」

その時、収入のない鈴ばあを援助してくれていたのが、凧太のじいちゃんだった。凧太のじいちゃんも鈴ばあを幼馴染で、ずっと鈴ばあのが好きだった。でも、その想いを伝えずにいた。

都会から乳飲み子を連れて帰ってきた鈴ばあをなんとか助けたかった凧太のじいちゃんは、鈴ばあに「なんも気にさねでけれ」と、多額の資金援助をした。凧太の家はこころ辺では力を持った家で、要するにお金持ちだった。

でも、それでも凧太のじいちゃんは、鈴ばあに好きだと伝えることはなかった。

「あの時は助かった、っていぐ言つてらつた」

その後母が大きくなってから鈴ばあは働きに出て、援助してくれた分のお金はちゃんと凛太のじいちゃんに返したのだという。何度も何度も口酸っぱく返さなくていいと言われていたけれど、そこは意地のようなものだったらしい。

「それに、幸蔵さんは知らねがったろうけど、鈴ばあはそのことで幸蔵さんの家から疎まれてしまったんだ」

「……そうだったんだ」

「んだ。お金返せるようになった頃には、幸蔵さんもお見合いで結婚してで、マリちゃん……ああ、リンちゃんのお母さんも中学生ぐらいになってでなあ」

知らなかった。そんなことが鈴ばあと凛太のじいちゃんの間にあったのだ。

でも、それなら「あの鈴どこのわらし！」と怒鳴られたのは、どうしてだったのだろう。お金をちゃんと返したのなら、鈴ばあが嫌われる理由もない。そもそも、鈴ばあのが好きっていうのは、今までずっとなのだろうか。だとしたら尚更――。

「もう寝るべ。明日も早えよ」

「うん、ありがとう。おやすみなさい」

時刻は二十三時を回っていた。

*

布団に入って、私はまた、鈴ばあの言葉を思い出し出していた。

へながまがつてもそばさいでける人といっしょになれ」

この言葉を言われた時、私は高校生だった。あの家出の日。私は両親と、当時付き合っていた彼氏のことで大喧嘩したのだった。

「なんにも知らないくせに、そんなこと言わないで！」

そう言つて、携帯電話と通学カバンだけ持つて家を飛び出した。行先も決めずただ駅へ走つて、たまたまた来た電車は鈴ばあんちの方へ向かう電車だった。鈴ばあんちに着いた時はもう夜で、玄関先で立ち尽くす私を、鈴ばあはただ家に入れてくれた。

そのまま私をお風呂へと促して、鈴ばあはきつとその時に両親に電話を入れたのだ。だから、喧嘩の内容も聞いたはずで。

私が彼氏にバイト代を渡していること。その額がだんだん増えてきて、バイトを増やそうと思つていること。そうして面接を受けたバイトが怪しい会社だったこと。

今思えば当時の私をしっかりとやりつけてやりたいほど信じられないことだけれど、その時は彼氏との未

来しか思い描いていなかった。実際、当時の彼氏は「将来結婚するんだから」が口癖だった。でも全然その気はなかったのだろう。会うたびに「ごめん、ちょっと今お金が足りなくてさ」と言うのだった。

お風呂から上がった私に夕食を出して、鈴ばあはその言葉を口にした。まっすぐに私の目を見つめて。いつもの笑顔ではなく、真剣な表情で。

「背中が曲がっても、かあ」

その言葉を聞いても、まだ私は恋に盲目だった。むしろ、その言葉をそのまま彼氏にメールするくらいだった。でも、返信がなかった。そのまま、その恋は自然消滅した。あっけなかった。

鈴ばあは、どういう気持ちでその言葉を言ったのだろう。若くして、ずっと添い遂げるつもりだった夫を亡くして。一人で子供を育てなければいけなくなつて。自分に好意を持つ男性に援助されて。でも、その男性の家には疎まれて。

私の知らない鈴ばあの人生が、突然ここに現れた気がした。
ピロン。

へてか、いつ帰ってくんの
へトイレットペーパーないんだけど

「俺が買ってこないといけないの？」

「……」

ピロン。

「なあ、」

「俺配信でいそがしんだけど」

「……今の私だって、鈴ばあに同じこと言われちゃうな」

目を閉じると、鈴ばあの、あの真面目な顔が浮かんでくる。もう十年近く前なのに、ついこの間のことのように思えた。

*

次の日は、朝から良く晴れていた。起きてから仏間にある白い柩を見て、ああ、やっぱり現実なんだ、と胸がつまる思いがした。スマホを開くと通知が五件来ていて、一つは職場の同僚から。「会社のことには気にしなくていいからね」。後の四つは隆志からだった。同僚にはありがとうと返して、隆志のメッセージは開くこともしないで、そのままスマホの電源を落とした。

葬式はしめやかに行われていく。私たちはバスで火葬場に向かった。

「凜太のじいちゃん来なかったね」

「火葬には来るって今朝連絡来てらった。リンちゃんのお母さんが連れでくるって」

火葬場に着くと、もう何人か参列の人が集まっていた。その中でひととき大きな声でわめいている男性がいた。

「スツが死んだなんてオラは信じね！ 勝手に連れできて！ うそこぐな！」

真っ赤な顔をして、何度も何度もそう言っている。そのたびに周りの人になだめられて、さらに叫ぶ。凜太のじいちゃんだった。喪服すら着ていない。本当にいやいや連れてこられたのだろう。

柩が運び込まれて今一度拝んだ後、最期のお別れとして、窓の部分が開けられる。柩の周りに集まっていく私たちを、誰かが全速力でかきわけていった。悲鳴が上がる。それも無視して一番に柩の前に立ったのは、凜太のじいちゃんだった。

「スツ！！！！」

それはもう、すごい光景だった。スツ、スツ、と何度もその名前を呼んで、凜太のじいちゃんは柩に抱きついて号泣した。どよめきが広がる。誰もそこには立ち入れなかった。静かな火葬場の一室に、その叫び声はこだました。

流す涙も鼻水も拭くこともせず、それはぼたぼたと垂れていった。やっと気を取り戻した周りの人たちがハンカチを差し出しても、凧太のじいちゃんはその手を払う。他の参列の方がいますので、と柩から係の人に数人がかりではがされた時も、じいちゃんは両手を伸ばし、柩にしがみつこうとした。

「他の方の迷惑になりますので」

「スツ！ スツ！！！！」

おさえられたじいちゃんは後ろの方に連れられて行って、私たちは動揺しつつも柩の鈴ばあに最期のお別れをした。鈴ばあはやっぱり眠っているようで、でも名前を呼んでも返事をすることはない。二度とその目が開くことはない。そして、これから鈴ばあは焼かれてしまう。

涙があふれて、止まらなかった。

「それでは、大変名残惜しくはありますが——」

柩が火葬炉に入っていく。もう炉の扉が閉められようという時、取り押さえられ座らされていた凧太のじいちゃんが立ち上がって、また柩に走っていった。

「おい、幸蔵！ 何考えでる！」

「幸蔵ちゃん！ 止まってくれ！」

「スツ!!!!」

他の参列者に羽交い絞めにされて、それでも凧太のじいちゃんは、まっすぐに鈴ばあの柩に手を伸ばしていた。

*

火葬を待つ間、私たちは併設されている休憩室で軽い食事を取っていた。凧太のじいちゃんは、今はもう何もできないというように、部屋の隅でうずくまっている。誰も話しかけられなかった。

「すごかったな」

「まさかこんなにだとは」

こそこそと、何人かがさっきの光景について話している。その様子から、どうやら凧太のじいちゃんが鈴ばあを好きだったことは近所では周知の事実だったらしい。

配られたおにぎりに手をつける気にもなれず、何となく部屋を見渡す。と、凧太のじいちゃんとう目が合った。すぐに顔をそらしたけれど、じいちゃんはハツとした顔をして、ふらりと立ち上がった私の方に歩いてきた。

「おめ、あぎ！ あぎだべ」

「え、あ、そうですけど」

凜太のじいちゃんは大きなため息をひとつ。その後、ぶるぶると全身が大きく震えて、わなわなと口が開く。

「はぐじょうもの！ えさ帰ってこねで！」

「は、え？」

真っ赤な顔で、唾を飛ばしてまくしたてる。

「スズの気持ちなんも考えねがったんだ！ おめみでんた、東京さ行って、田舎なんて捨てだよんた連中のせいで！」

突然のことで、何を言われたのかわからなかった。田舎なんて捨てだよんた連中？

「ちよ、ちよつとちよつと、幸蔵さん！ なに亜紀ちゃんに言ってるら！」

「ぞだ！ おめ、ちよつとおがしぐなってるぞ」

「ちよつと幸蔵さん！ うちの亜紀になんてごど！」

凜太のじいちゃんはまた取り押さえられて、部屋の隅に連れていかれた。父がその前に立って、怒っているのが見えた。

「わりな、亜紀ちゃん。幸蔵さん東京のご恨んで」

「なにも亜紀ちゃんさ八つ当たりさねたっていなさなあ！ 気にさねでけれ」

すぐにおばあさんたちが私の周りに集まってくる。これ食べで。ジュス買ってける。小さな子をあやすように、おばあさんたちは私を慰めた。私はただ、どうしてつかかってこられたのかわからなくて、押し黙る。

「……亜紀、鈴ばあさ、お水どごあげに行ぐが？」

「え、あー、うん」

母の突然の誘いに、私は立ち上がった。今この場所にいたくなかった。この場所にいたら、言われた言葉の意味を考えて、傷ついてしまう。

火葬炉の前の簡易的な祭壇に、水の入ったコップを載せて手を合わせる。祭壇に置かれた鈴ばあの写真はこやかに笑っていて、それは焼かれる前、最期に見た鈴ばあの顔のように安らかだった。

「鈴ばあ、亜紀のことが本当に大好きでなあ」

「そんなに？」

「ほんとだよお、もう、亜紀が生まれた時なんて、すぐ大きくなるのに沢山服作って」

「……」

「亜紀？」

「お母さん、私、無理してでも会いに来た方がよかった？」

涙がこぼれた。さつき言われたことが脳内で繰り返し返される。

〈はぐじょうもの！ えさ帰ってこねで！〉

「……さつき言われたごとは、なんも気にさねでいいんだ」

「でも！」

母の方を見る。複雑そうな顔をしていた。何かを言いよんどんでいるような。

「……幸蔵さんは、八つ当たりしてるだけだ。リンちゃんに絶縁されながら」

「絶縁……？」

「んだ。気にさねで。亜紀は鈴ばあにとって、大事な自慢の孫だよ」

「……お母さん」

「さ、お母さんは先に戻ってる。亜紀は鈴ばあさ、話すこともいつぺあるべ？」

そう言って、母は休憩室に戻っていった。

「鈴ばあ……」

それでも、私はずっと後悔すると思う。仕方がなかったってわかってる。コロナ禍のあの空気の

中で、私は秋田に帰ることはできなかった。でも。わかった上で、もっと元気な時に、まだ話せる時に会いにこれていたら。

鈴ばあの目を見て話せなかったことを、私はきつと、これからずっと。

「ごめん、鈴ばあ」

火葬炉の前は静かだった。

*

休憩室に戻る途中でトイレに入ると、手洗い場に人影があった。

「あつ！ 亜紀ちゃん」

「あ、……凛太のお母さん」

凛太のお母さんが、げっそりした顔で手を洗っていた。無理もないだろう。実の親が、あんなに暴れてしまったのだから。

「さつきは本当にごめんなさい。うちのじいちゃん、鈴ばあさんが亡くなってから、おかしくなっちゃって」

「いや、良いんです。……それより凜太、絶縁って？」

「ああ、聞いたの」

ハンカチで手を拭いて手洗い場に寄りかかった彼女は、小さく息をはいた。

「すみません、プライバシーですよね」

「いいのいいの。こんなちつぽけな町じゃ、プライバシーもなにも、あつたもんじゃないでしょう？」

「……」

彼女は遠くを見つめた。……こんなことを言う人だっただろうか？ ちゃんと会って話したのは小学校の時以来だけど、その時よりも、言葉遣いも雰囲気も違って見えた。

「簡単な話よ。お盆で帰ってきた時にね、彩佳ちゃ……、リンのお嫁さんに、女の子しか産めないなんてって、じいちゃんがどなって」

「そんな、」

「酷い話ね。でも日本にいる孫はリンしかいないから、跡を継げ、おどごわらしを産め、って。まあ、あの性格なら、そんなことも言えちゃうんだろうね」

「それで、ですか？」

彼女は頷いた。

「リンはもう顔を真っ赤にして。次に会う時はジジイ、お前の葬式だ！　って。そのまま荷物をまとめて東京に帰っちゃった。それが六年前」

私は何も言えなかった。言う言葉が見つからなかった。

「だから、さっきのじいちゃんのは八つ当たりなの。本当にごめんなさい」

「いえ、いいんです……。本当のことだから」

私が俯くと、肩をそつとなでられた。ぞわつと皮膚が粟立つ。

「ねえ亜紀ちゃん。若い子は外に出たっていいの。コロナだつてあつたでしょう。そういう運命だったのよ」

「うん、めい……」

「そう。……さつき火葬の前のじいちゃんを見たでしょう。あの人だつて、自分の運命を受け入れられないだけなの。鈴ばあと結婚できなかったことを、一生後悔してる」

あきれたような声だった。

「でもそれは、あえて言わなかったんじゃない」

凛太のお母さんは首を横に振った。

「言わせてもらえなかったのよ。……親に反対されてね」

凧太の家は由緒正しい家だった。当時の言葉でいうところのコブ付きの未亡人なんて、受け入れられてもらえるはずがなかった。そして凧太のじいちゃん、それに従うしかなかった。

「……」

「だから当然の報いなのよ。リンに絶縁されたのも」

「そんなのって……」

「昔はそういうのばかりだった。今はマシになったかもしれないけどね。……私だって」

「……？」

目を閉じて息をはいて、彼女は小さく首を左右に振る。

「妹みたいに海外に行きたかった。でも、長女だったから。……だから、リンがもう東京で一生過ごすって決めたのも、受け入れたの。私もきつと、そういう運命なのよ」

諦めた表情。凧太のお母さんの過去なんて、何も知らなかった。小さい頃に会った時は、そんなことひとつも滲ませることもなく。にこにここと接してくれた。そうか、お互い大人として話すのは、これが初めてなんだ。昔とは違う、対等な立場で話をされているのだと気づく。

「……」

「つと、ごめんなさい。トイレに入ったのに、私ったらこんな長話」

ぱつと表情が明るくなる。さつきまでとは違う明るい声。

「あ、いや、いいんです！こちらこそすみません、こんなところで立ち話をさせてしまって」

「いいのいいの。亜紀ちゃんと話せてよかった」

「わ、私も、よかったです」

「本当に、ありがとう。……またね」

「はい、また……」

トイレから出ていく彼女を、私は今までとは違う気持ちで見つめた。

*

休憩室に戻ると、凜太のじいちゃんはいなくなっていた。凜太のお母さんも。どうやら、帰ってしまったらしかった。またね、っていつだろう。私はぼんやりと宙をあおぐ。

さつき聞いたことを思い出す。運命って、なんだろう。

鈴ばあと凜太のじいちゃんが結婚しなかったから、凜太のお母さんが生まれて、凜太が生まれて。

凜太は東京で一生過ごすことにして。

凜太の家に疎まれていたことを察せるくらい鈴ばあなら、きっと凜太のじいちゃんが親に止められて結婚を言い出せなかったのも、わかっていた。鈴ばあが凜太のじいちゃんと一緒になりたかったかは、わからない。だけど、もし二人の間に決定的な何かが起こっていたとしたら？

もし、二人が結婚していたら。もし、二人がへながまるまで、一緒にいたとしたら――。

今とは全然違う未来があったのだ。

ふと、スマホの電源を入れてみる。画面が明るくなって、ロック画面に通知件数が表示される。六十五件。ニュースサイトが四件。残りはすべて、隆志だった。もうメッセージアプリを開く気にもならなくて、そのまま、また電源を落とす。

運命、か。

その時火葬の終了を告げるアナウンスが鳴って、私たちは収骨室に向かった。

真っ白な骨になった鈴ばあ。その遺骨を、みんなで黙々と箸で拾う。大きな骨、小さな骨。

悲しくて涙をこらえて拾っていると、鈴ばあとの思い出がいくつもいくつも思い出された。

鈴ばあ、鈴ばあ。大好きだよ。鈴ばあ。ごめん。鈴ばあ。

頭に浮かぶのは、そんな言葉ばかりだった。最後に小さな骨壺にそのすべてが詰め込まれて蓋をされて。鈴ばあの人生は終わりを告げた。

*

「今日も泊まっていぐべ？」

「うん」

泣き腫らした目で窓の外を見つめる。葬式がすべて終わって、私たち家族三人は鈴ばあんちから自分たちの家へ向かう。

「それにしても、今日は大変だったな。幸蔵さんがまさか……」

「お父さん、その話はいいって」

母が運転しながら父の言葉をさえぎる。

「でも、亜紀にひでごと言つて。許せねがった」

「……ありがとね、お父さん」

「それより亜紀、隆志くんさは、連絡入れなくていんだが？」

母がそう言つて、ミラー越しにわたしの方を見た。

「……うん」

「？ なした？ 喧嘩でもしたか？」

あれからまだ、スマホの電源は入れていない。きつとんでもない量のメッセージが届いているはずで。でも、私はもうスマホを手取る気にもならなかった。

「ねえお母さん」

「ん？」

「運命って、何かな」

「運命？ なして？」

私は凛太のお母さんの話をしようとして、口をつぐんだ。

「こんなちっぽけな町じゃ、プライバシーもなにも、あつたもんじゃないでしょう？」

本当に、その通りだ。今日の凛太のじいちゃんを見たみんなの反応。今ここで私が母にこの話をしたら、母は悪気なく周りの人に話してしまう気がする。

母を悪く言いたいわけじゃない。今日のみんなを悪く言いたいわけじゃない。ただ、一滴でも垂らしたら、瞬間に広がっていくだろうことは明白で。

「あ、いや……。今日の凛太のじいちゃん見てたらさ。思ってた」

「ん……。う、ん、め、い、うんめい……」

車は午後の国道を緩やかに走っていく。しばらく走行音だけが車内に響いた。空はやっぱり晴れていて、雲一つない。

「お父さんは、」

声を出したのは、父だった。

「お父さんは、運命っていうのは、自分でどうにかするもんだと思ってる。んだども、どうにもできないごどももあるのも、わがってる……」

父は上を見上げた。

「だけど、父さんはどうにかしたい、ど思ってやってきた。もしここで後悔する、ど思ったら、後悔さね方を選ぶ」

「……父さんは、後悔したごども、あるもんね」

母が静かにそう付け足した。

「んだ」

車内にはまた、静けさが戻った。私はそつとスマホを手に取る。真つ暗な画面に泣きはらした顔が映る。苦しそうな、耐えているような。気づいていないふりをしていた気持ちがあふれてくる。

後悔さね方。

……私は。

「……へなが」

「ん？」

「一度、家出したでしょう？ わたし」

「ああ、高校のどぎ」

「あつたなあ。大変だったけえ」

「あの時ね、言われたの。へながまがってもそばさいでける人といっしよになれって。鈴ばあに」
母も父も、私の言葉を待っている。

「ねえ、お母さん、お父さん。私、隆志と別れる」

*

次の日の朝も、気持ちがいいほどによく晴れていた。

「せば、職場の人たちさ、よろしくな」

「ありがとうございました、って、伝えてくれ」

「わかってるよ」

「せばまず、気いっけでな」

「家さ着いたら連絡な。へばな」

新幹線の改札口で、母と父は大きく手を振ってくれた。私もへばなど大きく手を振り返し、ホームに向かう。あれもこれもと持たされたお土産でキャリーケースはパンパンだ。手料理が入ったタッパーはさすがに断った。

隆志からのメッセージはまだ既読にしていない。どんどん増えていく通知もオフにしたから、どんな言葉が送られてきているのかも、もうわからない。それでいい。

昨日あの後、何も言わなくても、二人はわかってくれたようだった。あれから一度も隆志の話は出ていない。私の人生の選択を、母も父も見守って、受け入れてくれるのだろう。

運命というものがあるならば、後悔しない方を選びたい。

停車していた新幹線に乗り込んで一息つく。これから何時間か後には隆志のいる自宅に戻って、それで――。

この後起こるであろういくつものことを想像して、気が重くなる。隆志は暴れるかもしれない。大声で私を罵倒するかもしれない。泣かれるかもしれない。でも、やっぱりそれでも。

へながまがつてもそばさいでける人といっしょになれ

鈴ばあの声でその言葉を思い出す。あの真剣なまなざしが、私を見守ってくれている。

鈴ばあと過ごした時間、鈴ばあが私を想ってくれた時間、鈴ばあが私にくれた言葉。そのすべてが今、私の味方でいてくれる気がした。

決意をした私を乗せて、今、秋田新幹線は東京へと動き出す。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

宝石と重い石

高山 准

幼い頃、家のりんごもぎを手伝いました。大人の使うカゴを肩にかけてりんごを収穫する。自分としては「おてつだい」のつもりだったのですが、役に立っていたかと言えば定かではありません。そうやって自然の中で家族みんなといることが大好きでした。雪深い田舎で育ちましたが、辛い記憶よりも楽しい記憶の方が今は心に残っていますし、残しておきたいと思っています。宝石のような大切な思い出です。

本作はフィクションであり、実在の人物や出来事を元にしたものではありません。

ですが、同年代で秋田を離れている人は少なくありません。「秋田にはなにもないから」。そういう言葉も耳にします。

秋田を出た人であっても、私と同じく宝石のような思い出があるはずです。秋田が完全に嫌いで離れていったわけではないと思います。

「私自身もこの地に生まれ、進学のため一度県外へ出て、卒業後に戻ってきました。しかし、「ここで生きていけない理由」があれば、離れていたかもしれません。思い出だけでは生きられないからです。」

また本作には、「誰しもが胸に、冷たくて重い石を抱えているのではないか」という想いも込めました。生きていくには決断や選択が不可欠ですが、それを自分以外の何かによつて決められてしまうことも、もちろんあります。むしろそうした制約がない方が珍しいです。受け入れるしかなかった物事は、胸に石となつて残り続ける。

目の前で笑っている相手の胸にも、そんな石があるかもしれない。そう気づいた時、この話を思いつきました。

宝石のような思い出も重い石も、胸の裡に積んでいくことが、生きることなのかもしれません。

私事ですが、小説家を志して十六年になります。多くの素晴らしい応募作の中から見つけていただけで、本当に嬉しく思います。

選考委員の皆様、主催の県の方々に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。この度はありがとうございました。

第12回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

流木と悪魔

位ノ花
薫・作

流木と悪魔

目覚めたら、脇本海岸わきもとの流木になっていた。

わたしには自分の姿が見えない。では、なぜそうわかるのかというと、鎌田さんが教えてくれたから。

「いい流木だ」

そう言つて、彼が毎回わたしを撫でていくから。

鎌田さんは、近所に住む老翁。流木体感時間の午後二時ごろ、浜辺を散歩しに来る。

毎日、黄色いバケツを手にして歩く彼は、あらゆる漂着物を拾っていく。流木、貝殻、瓶、缶、ペットボトル、ごみ。だれかが放つていった、恐ろしく古そうな週刊誌までも、彼のバケツに吸い込まれていった。

鎌田さんは、漂着物を使った芸術作品を作っているらしい。わたしの仲間である流木は、「ハンガー」や「オブジェ」というものに変身するそうだ。

今日も昨日と空の色が似た時間帯に、鎌田さんはやってきた。

防水パーカー、ゴム手袋。褪せたジーンズを長靴にイン。鎌田さんの服装は完璧だ。冷たい潮風で頭を痛めないよう、毛糸の帽子もかぶっている。

鎌田さんは波打ち際に目を凝らしている。今日のターゲットはなんだろう。わたしだったらいい

のにな。

そう願うのは、きつとわたしだけ。砂浜に生息する大抵の生き物は、鎌田さんを悪魔だと思っ
ている。

「うわっ、鎌田のじじい、来やがった」

磯ガニが、わたしの陰に身を潜めた。彼は以前、砂浜で干からびていた仲間の亡骸を、鎌田さん
によつて海に葬られた。

「逃げよ、逃げよっ」

「悪魔に捕まったら最後だ」

「みんな、穴に潜れー！」

慌てるフナムシには悪いけれど、あなたたちは鎌田さんの眼中にないと思う。

わたしは、鎌田さんに拾ってもらいたい。

なにせ流木として目覚めて以来、同じ空と海しか見ていないものだから飽きてきた。大雨の日な
んて憂鬱になる。鎌田さんは来ないし、海はごうごう唸つてうるさいし、高波なんて浜辺のあらゆ
るものを巻き込もうとして迫ってくる。

わたしは海ほど不安定な存在を見たことがない。空もいい勝負だけれど。でも空は、星や夕焼け

や、美しい入道雲を見せてくれるから、好き。

長いあいだ、かがんだ状態で獲物を探していた鎌田さんが、ふう、と背筋を伸ばした。腰に手を当てて、背中を後ろに反らしたり、両腕をぐるぐる回したりしている。あの動作を、浜辺の生き物たちは「悪魔のダンス」と呼ぶ。

——そろそろ休憩ですね、鎌田さん。

悪魔のダンスのあと、鎌田さんはひと休みをする。わたしという流木に腰を下ろして。

脇本海岸に、砂に埋もれて息絶えた、樹形巨人みたいな流木があったら、それはわたし。

「樹形巨人」とは、人間の子供につけられた名前。どんなものかは知らないけれど、彼らがわたしを蹴ったり殴ったりすることを思うと、人間の敵みたいだ。

わたしは鎌田さんに拾ってもらえない。鎌田さんが持ち帰るには、あまりに大きすぎるから。わたしというやつは、根っこがついた一本の原木状態のまま、海を旅してこの砂浜に漂着したらしい。そこらに落ちている流木は小ささまさまあるけれど、片手で持てるものばかりだし、大きくても人間の大人がふたりいれば運べる。

でも、わたしは無理。

「これはクレーン車ででもなきや無理だぞお」って、鎌田さんもわたしを見て言っていた。

——鎌田さん、クレーン車って、なんですか？ クレーン車があれば、わたしをおうちに招いてくれますか？

あの日からわたしは、浜辺にクレーン車が打ち上げられる日を夢見ている。

鎌田さんが、わたしに座った。

わたしの後ろに潜んでいた磯ガニが、慌てて逃げていく。流木には前も後ろもないけれど、鎌田さんがいつも向く海側を前としよう。

本日の鎌田さんは、流木のほかに、褪せた紐や汚れたビニール袋をバケツにおさめていた。

脇本海岸の漂着物ハンターは鎌田さんだけではない。石や貝殻を探して浜辺をうろつく人間は、日々ぼつぼつとやってくる。以前、人間の集団がやってきた日には、浜辺の生き物がざわついた。けれど人間は生き物に危害を加えず、砂浜に散らばるごみだけを回収して去っていった。

一度綺麗になったところで、波は新たなものを運んでくる。そして新たなものを、鎌田さんは拾っていく。

ふいに、鎌田さんが歌い出した。

しみじみおもう、しみじみと。おもいでだけでいきてゆく。

毎回彼が口ずさむ歌を、わたしも覚えた。

鎌田さんは、浜辺にほかの人間がいても気にせず歌う。彼自身は波音に声がかき消されると思っているようなだけけれど、そんなことはなく、しっかりとまわりに響いている。そのせいかな人間の子供からは「しじみじい」と呼ばれていた。鎌田さんの滑舌が悪いから「しじみ」が「しじみ」に聞こえるようだ。

しじみおもう、しじみと。おもいでだけでいきてゆく。

——曇りの日の波音みたいに、哀愁漂うリズムですね、鎌田さん。

思い出だけで、生きてゆく。

思い出とは、記憶のこと。

わたしには、ここで意識を持つ以前の記憶がない。気づいたら、脇本海岸の巨大流木として存在していて、わたしの上には鎌田さんが座っていた。

記憶がないだけで、本当の自分は人間だったのではないかと思っている。だって、ただの流木にしては世界の多くを知っている。

人間の言葉や、鎌田さんが人間の「おじいさん」と呼ばれる部類であること。流木、シーグラス、貝、石、ナマコといった、ものや生き物の名前までも。

ただ、わからないことだらけなのも確かだ。わたしはこの浜辺以外の景色を知らず、想像すらで

きない。鎌田さんのおうちはなにでできているのだろう。大きな貝殻？ 消波ブロックの間隙？ それとも砂のなか？

わたしはいつ人間に戻るだろう。そう考えつつ、人間だったころの自分を知らないから焦らないし、上手に悲しめない。人間になりたいかと問われたら、すぐに「はい」とも言えなかった。人間は、なんだか悲しそうだから。

鎌田さんはたまに、しじみの歌を口ずさみながら涙を流す。ぽつりと雨粒が落ちたと思ったら、鎌田さんの涙だった。きつと鎌田さんは、泣くために歌っているのだ。

——いいんですよ。大いに泣いてください、鎌田さん。あなたの涙は、わたしが吸収して乾かします。ところが今日の鎌田さんは、泣くまでに至らなかった。お友達に声をかけられたから。

「おう、鎌ちゃん。調子はどうよ」

鎌田さんの背中を叩いたのは、佐々木さん。つるつる頭に巻かれた緑のバンダナが彼の目印。佐々木さんは、鎌田さんと同じくらい老いている。

「まあまあだあ」

鎌田さんがにやけた。

ふたりは仲良し。会えばわたしに座って、長い時間おしゃべりを楽しむ。

話を切り出すのは、だいたい佐々木さんからだ。

「あっちの風景、だいぶ変わったなあ、道の先に半分しか海が見えね」

「だなあ」

寂しそうに、鎌田さんが頷いた。

わたしには見えないけれど、数年前から、海沿いに新しい防波堤が作られつつあるらしい。防波堤は、船越という地域まで続く長いものになるそう。そのうえ鎌田さんや佐々木さんの背よりも大きくて、砂浜へ下りるためには階段を使う必要があるという。

——鎌田さん、佐々木さん。防波堤、いいじゃないですか。海は日々、姿を変えます。波はすべてをさらいます。さらわれて喜ぶのは、波打ち際で瀕死状態の海洋生物だけです。人間は、海では生きられないのでしょうか？

「でもなあ、津波はおつかねえから」

呟く佐々木さんに、鎌田さんが続いた。

「こうして守ってもらえるのは、ありがてえこった」

「透明な防波堤とか作れねえのかな」

「強化ガラスか？」

「そうだ。豪太の水槽みてえなやつ」

「豪太の体当たりは耐えられても、津波には負けるべ」

わたしは豪太という存在を、最近まで屈強な人間のことかと思っていた。しかしどうやら人間ではなく「ホッキョクグマ」という動物の名前らしい。豪太の居場所は、はるか先の海沿いの、男鹿水族館。水族館という場所には、海の生き物が人に見られるかたちで暮らしているのだとか。「防波堤を透視できる眼鏡でも開発してくれねえかな」

——佐々木さんは、本当に海の景色が好きなのですね。

人間の住む場所から海岸に続く道は、何通りかあるようだ。そのなかでも佐々木さんは、海の見える一本道に愛着があるらしい。一本道の先は砂浜へ下りる坂に繋がっていて、視界を遮るものがないから、果ての海が深い水たまりのように見えるのだそうだ。

海があるということは、その上に空がある。

——向かう先が青一色だなんて、まるで天国への道そうですね、鎌田さん、佐々木さん。

こうしてわたしは語りかける。彼らに流木の声は聞こえないから、当然わたしは会話に交ざれない。それでも同じ空間にいるだけで、流木の中心が温まる。

佐々木さんが話を変えた。

「民家への強盗事件が多発してるって、だいぶ前にニュースでやってただろ」

「ああ、最近はあるまい聞かないけどな」

「警戒したほうがいいぞお。ここらは老人が多いからなあ。最近、不用品買取業者を名乗る若者が、この辺の家を訪ねて歩いてるんだと。それも本物かわかったもんじゃねえ」

「うちにも来だぞ。使つてねえテレホンカード買い取つてくれた」

「あぶねえ！ それ下見役かもしれないぞ。指示役、下見役、実行犯、金の運び屋って役割が分かれてるんだ。指示役の上には幹部、幹部の上にはボスがいるんだぞお」

佐々木さんは、どこからか仕入れてきた情報を、いつも得意げにしゃべる。たまに、話を大袈裟にしてない？ と感じることもある。

空の色がオレンジ色に変わってきたころ、ふたりはわたしから立ち上がった。鎌田さんは去り際、いつものようにわたしを撫でてくれた。

「いい流木だ」

夜の海に人間は近づかない。理由はなんとなくわかる。暗いし怖いし、波打ち際からなにかが這い出てきそうな気配があるから。

太陽の眩しい季節には、薄着の人間たちが火花の吹き出る棒を楽しみに来ることがある。

わたしは、明るくて眩しいあの火花が好き。暗闇に月や星以外の光が灯るのは、わくわくする。

鎌田さんの服装を見る限り、今は寒い季節。彼の毛糸の帽子が布地の帽子に変わったら、春がきたということ。夏は麦わら帽子、秋は再び布の帽子になる。

わたしが流木として目覚めてから、どれくらいの日が流れたのかはわからない。けれど鎌田さんの帽子の移り変わりを、もう数えきれないほど見てきたように思う。

過去に鎌田さんと浜辺を訪れていた人間の子供や女たちは、いつの間にか姿を見せなくなった。そして季節がめぐると、鎌田さんの身体は心なしに縮んでいき、髪は灰色に染まっていった。

——人間も季節と同様、姿が移り変わっていくのですね、鎌田さん。

「いい流木、ねえ」

磯ガニの声でした。夜に染まる砂浜に、彼の姿は見つけられないけれど、そばにいるのはわかる。

「おめえさえいなきゃ、鎌田のじじいは来なくなんのか？」

ぎよつとする発言だ。磯ガニ一匹にわたしを動かすことはできないだろうけれど、ショックだった。

人間の子供に「樹形巨人」として蹴られるのは、まだいい。「樹形巨人」は本当のわたしじゃな

いから。けれど流木としての自分を嫌われてしまうと、なんだか木の中心部が痛む。

——そんなこと言わないで。

わたしの訴えは、なんと届いた。

「はんっ、俺におめえを運べるわけねえだろ」

試しにもう一度。

——わたしの声が聞こえるのですか？

「聞こえるもなにも、いつもひとりです、ぶつくさしゃべってるじゃねえか」

——今までだれも話しかけてくれませんでした。

「不気味だからだよ。しゃべる流木なんていないからな。お前、浜辺の生き物たちから『念仏巨木』って呼ばれてるぞ」

——てつきりわたしの声はだれにも届いていないのかと。

「鎌田のじじいには届いてねえな。人間とは周波数が違うから。お前が昼間『眼中にない』って言うたの、フナムシのやつらカンカンに怒ってたぞ」

話しかけたつもりのない言葉まで聞こえているなんて。わたしは急に自分の扱い方がわからなくなった。もしかして、今の語り口調もすべて筒抜けなのだろうか。

「ぜんぶ聞こえてら」

——それはお恥ずかしい限りで。

だからといって、流木の在り方は変えられない。わたしは声の大きさを調整して、話し言葉と語り言葉をわけることにした。今は、うんとちいさなささやき声でしゃべっている。「急に黙んなよ」と言われたから、とりあえずは成功だ。

——フナムシさん、ごめんなさい。鎌田さんはあなたたちを拾わないから、慌てる必要はないと言いたかったんです。

「いきなり怒鳴んなよ！」

今度は大きすぎた。音量の調節が難しい。

——すみません。このくらいでいいですか。

「まあいいだろ」

磯ガニの肯定のあとで、付近の砂浜から、ふつふつと泡立つような声が重なった。

「べつにいいさ」

「あたしたち、跳ねて忘れる」

「おれたち、陽気」

「跳ねたらハッピー」

ああ、よかった。わたしはお礼を告げて、磯ガニとの話に戻った。

——わたしはいつからこの浜辺にいるのでしょうか。

「だれも知らない。うんと昔からいるんだろ」

——わたしには記憶がないのです。気づいたらここで流木でした。

「俺だつて気づいたら磯ガニだったさ」

——命とは、そういうものなのでしょうか。

「お前は生きてる感じじゃなさそうだけだな」

——え？ わたし、死んでいますか？

「木って普通、地面に生えてるもんだろ。で、樹皮があつて、枝に葉を茂らせてる。お前は樹皮が
ずる剥けの裸状態で横たわつてるし、生きてる感じがしねえよ」

——じゃあわたしつて、なんですか？

「こつちが聞きてえよ！」

会話が気になって近づいてきたのか、周囲に生き物たちの気配を感じた。カニ、貝、フナムシ、
名前の知らない虫たち。波に打ち上げられてしまったナマコや、よくわからない生き物も、こちら

に意識を集中させている空気感がある。

——鎌田さん、夏でもないのに、今夜はなんだか明るいのです。

今日も昨日と空の色が似た時間帯に、鎌田さんはやってきた。いつもと違うのは、鎌田さんの帽子が布地のもので変わっているということ。ああ、そうか。

——鎌田さん、春が来たのですね！

春の陽気は人間の心を浮き立たせるらしい。鎌田さんの足取りは軽く、表情はいつもより柔らかかった。

本日の鎌田さんは、茶色い石をつまみ上げては天にかざしている。お日様の光をたくわえて、ぼうつと明るくなった石だけが、鎌田さんのバケツに迎えられた。

あれは黒曜石というものらしい。「光に透ける性質があるから、太陽にかざして見分ける」「脇本海岸の黒曜石は色が薄い」と以前、鎌田さん以外の人間が話しているのを聞いたことがある。

鎌田さんは素晴らしい黒曜石を見つけた。空にかざした石が、発光するように輝いている。

満足そうに微笑む鎌田さんは、悪魔のダンスを済ませたあとで、いつもより早めにわたしに腰を下ろした。

——この時間なら、佐々木さんが来る前に歌えますね、鎌田さん。

しかし鎌田さんは歌わずに、穏やかな海面を眺め続けている。時折わたしを撫でる手つきから、彼の満たされた思いが伝わってきた。

——なにか嬉しいことがあったのですか？ 鎌田さん。

そう、鎌田さんには嬉しいことがあった。佐々木さんが来て、ふたりのおしゃべりが始まったとき、それは判明した。珍しく鎌田さんが切り出したのだ。

「明日、孫が遊びにくるんだ」

「宗助が？ 家族みんなですか？」

「いんや、宗助だけ。春休みで、こっちに来る予定があるんだと。一緒に夕飯食うんだ」

「そりゃよかったなあ！ 何年ぶりだ？ 大きくなったべ」

「十年ぶりだな。もう大学生だあ」

宗助君、大学生。何度か前の夏に、鎌田さんと砂浜を歩いていたあの男の子が、宗助君？ 孫とは、人間から産まれた子供から産まれた子供。それは、鎌田さんの家族！

ひとりきりで海を訪れるようになった鎌田さんを、わたしは心配していた。彼の暮らしのなかには、家族という存在がいたはずなのに、いつの間にか鎌田さんからは、ほかの人間の気配がしなく

なった。

鎌田さんがしじみの歌をうたうとき、きっと彼はいなくなった家族を思い出している。だからわたしは密かに、みんなが死んでしまったのではないかと思っていた。わたしの知らない場所で、波にさらわれてしまったのではないかと。

——なんだ、離れて暮らしていただけなのですね、鎌田さん。

でも、どうして離れ離れになってしまったのだろう？

わたしの疑問が解消されないまま、ふたりの話は逸れていった。

「鎌ちゃん、見たことあるか？ バリュの入り口で、よく手押し車に座ってるばあさんがいるんだが」

「ああ、今日見たかもな」

「俺の初恋の相手に似てる」

「ヒサちゃんか」

「もしかしたらヒサちゃんかもしれないね。俺、声かけてみていいかな。ナンパだと思われて警戒されちまうかな？」

「ばあさんがじいさんにナンパされるなんて思うだろうか」

「バリュでパン買って、イトインスペースでお茶なんて乙じゃねえか？」

「俺あ、ああいう洒落た空間は落ち着かねえ」

バリユとは、鎌田さんたちが通うスーパ―。スーパ―とは、人間が食べ物を手に入れるための場所。鎌田さんは宗助君を迎えるため、午前中に食料をたくさん買い込んできたらしい。

——明日が楽しみですね、鎌田さん。

その夜、わたしのまわりには浜辺の生き物たちの輪ができていた。多くは磯ガニとフナムシだ。地中には貝もいる。

昨晚で、わたしは彼らの仲間として認識された。「とりあえず話は通じるやつ」という印象を与えられたのがよかったらしい。

輪のリーダーは磯ガニ。唯一「念仏巨木」を恐れなかった彼は、みんなから一目置かれている。

「孫が来るんじゃ、明日は鎌田のじじいは来ねえな。安息日だ」

磯ガニの言葉に、フナムシたちが跳ねて反応する。

「それって天国」

「どつても跳ね日和」

「拾われることはないけれど」

「いつか踏まれるかもしれないし」

ふと、後方から、大型生物の足音が聞こえてきた。二足歩行がふたつ重なるこのリズムは、やや大きいタイプの人間から生じるものだ。

話し声が、だんだん大きくなって近づいてくる。

浜辺の生き物たちは、散り散りに逃げ出した。磯ガニは、わたしの陰に身を潜めている。

「どうしてあの家にしたんですか？」

「倉庫に芸術品がたんまりあるんだと。金になるものならなんでもいって指示役が言うから」

若い人間の男の声だ。声が太いから、少年というほどではない。

男たちが、わたしに腰を下ろした。みしり。わたしの一部が軋む。

「段取りの確認だ。孫の宗助役のお前が、鎌田のじいさんを海に連れ出す。俺はそのあいだに家を漁るから、なるべく長い時間引き留めるよ。終わったら、ワンコールで電話を切るから」

——え？ ちよつと、あなたたち？

鎌田のじいさんとは、わたしの友人、鎌田さん？ わたしに座る、ふたりのうちどちらかが宗助

君？ の、役とは？

説明を聞いていた男が、不安そうに呟いた。

「本当に大丈夫でしょうか」

「出て行った家族とはもう十年連絡を取ってないって話だ。孫がどう成長してるかも知らないんだから、うまくやればいける。やるしかないんだよ。わかるだろ？」

「はい」

「そんな暗い声出すなよ。お前はまだいいよ。俺なんか下見役もやらされたんだから。そのうえ長い話まで聞かされてさ。ひとり暮らしの老人は話し相手に飢えてるんだ」

「そうですね」

「この作戦はうまくいく。ここらはまだ強盗事件が起きてないし、警戒が薄いからな」

「はい……」

「おい、絶対逃げるなよ。お前が失敗したら俺も終わるんだからな」

「わかってます」

指示役、下見役……老人を狙った……強盗！

これは昨日、佐々木さんが話していた、事件！

驚きのあまり、わたしは朽ち果てそうになった！　しかし流木としての変化はなく、変わらず若者の着座を許している！　ああ、高波よ！　今すぐ悪者たちを飲み込んでおくれ！　鎌田さんは騙

されている！ 鎌田さんに危険が迫っている！

「おい、落ち着けよ……」

地面から、磯ガ二になだめられた。わたしの混乱はおさまらない。

——鎌田さん、事件です！ 宗助君は偽者です！ 鎌田さん！

わたしは今日ほど、流木である自分を悔やんだ日はない。

空が夕焼けに染まり始めたころ、鎌田さんはやってきた。隣に、偽者の宗助君をつれて。

穏やかな笑みを浮かべる鎌田さんのそばで、偽宗助君は身を縮ませている。それでも存在感があるのは、彼がなかなかの巨漢だから。偽宗助君は、汗の滲む額を何度も袖で拭っている。

——気づいてください、鎌田さん。彼、明らかにおどおどしているではありませんか。宗助君はもつと華奢な少年だったでしょう？

だめだ。鎌田さんの頬はゆるみきつっている。嬉しそうに垂れ下がる瞳は線虫ほど細い。狭い視界では、偽者を見極められないのだ。

「ほら、だけえ流木、まだあるんだぞ」

鎌田さんが偽宗助君に、わたしへの着席を勧めた。

——そんな、だめです、鎌田さん。やめろ、偽者。汚いお尻をわたしにつけるな！

どれだけ吠えたところで、声は届かない。悪人に腰を下ろされて、わたしの一部が軋む。

ああ、いったいどうしたらいいのか！ 今この瞬間にも、もうひとりの悪人が鎌田さんのすみかを漁っているというのに！

「おい、落ち着けよ」

「わたしの陰から、磯ガニが声をかけてきた。

——これが落ち着いていられますか！

「だからって、なんもできねえだろ」

——なんにもできないから騒いでいるのです！ 磯ガニさん、あなたは動けるでしょう。助けてください。

「なんでだよ。そいつは悪魔だぞ。鎌田のじじいだけじゃねえ。人間はみんな悪魔だ。多くの浜辺の生き物たちが連れ去られていった。悪魔同士、潰し合ってもらいたいね」

——ひどい！ 砂浜のことは人間に任せろくせに！

「だれがいつ任せたよ」

——鎌田さんは砂浜を綺麗にしてくれるではありませんか！ それも海辺の生態系が崩れないよ

う、配慮しながら！

貝や石や流木が、生き物のすみかや隠れ場所になることを、鎌田さんは知っている。だからこそ彼は、過剰に溢れたものだけを拾っていく。

——人間がいなければ、砂浜は悲しき墓場になるでしょう。見てください、山のように積み重なった流木やごみを。死してなお、砂浜で干され続ける生き物の亡骸を。想像してください。まったくアウェイな場所に流れ着いてしまった流木の切なさを。

「知らんよ。俺、カニだし」

——海が運ぶごみを、鎌田さんは拾っていきます。この砂浜には、そういう人間がたくさん訪れるではないですか。ごみを拾うためだけに、人間の集団が訪れることもあるでしょう？ みんな海を、この景色を大切に思っているのです！ 浜辺の生き物と同じく、人生の一部として愛しているのです！

磯ガニが押し黙ったところで、鎌田さんが口を開いた。

「ちいさいころの宗助、この流木が好きだったな。よく一緒に座って話したんだ。宗助は帰るときに、いつもこいつを撫でていったな」

——そうなのですか？ 鎌田さん。

それはきつと、わたしの意識が流木として目覚める以前の話。

わたしと同様、当然知らない偽宗助君は、言葉を濁した。

「そうだったっけ」

「山どもも好きだったな」

「うん」

「山車を引くの、もう何年もやってねえんだ。子供も少なくなっちゃったしなあ」

「そうなんだ」

「いずれ防波堤ができれば、海沿いの景色も変わるな。悲しいなあ」

「そうだね」

「なにもかも、いつまでも変わらねえと思ってたのにな」

「本当だね」

「でもな、宗助がいたころの景色は今も胸に残ってる。この場所がどう変わっていても、俺の記憶のなかで、あのころのまま、変わらずあり続けるんだ」

「うん」

「で、おめえはだれだ？」

一瞬、海辺が静まり返った。波さえも、行動を止めた気がした。

——気づいていたのですか？ 鎌田さん。

カモメが鳴いて、世界に音が蘇る。

偽宗助君の動揺は、震えとなつて、わたしに伝わってきた。

「え、おじいちゃん、俺、宗助だよ……」

なんて弱々しい声だろう。偽者本人も、騙しとおす自信がなさそうだった。

鎌田さんが、強い声音で告げる。

「いくらボケかけのじじいでも、孫と他人くらい見分けがつく。買取業者の兄ちゃんはグルか？」

「あ……」

「俺もやすやす話しすぎちまったな」

「おいおい、すげえな、鎌田のじじい。冴えてるじゃねえか」

磯ガニが、陰からはさみでわたしをつついた。

鎌田さんは、本当に冴えている。

「俺が見てねえ隙になにか盗んだのか？ それとも俺を外に連れ出したってことは、今ごろ仲間が家を荒らしてるのか？」

偽宗助君もとい見知らぬ青年は、まともに声が出ない様子だった。

「やめとけ、やめとけ。うちにはなんもねえぞ」

「で、でも、倉庫に芸術品がたくさんあるって」

「こいつばかだな。白状したも同然だぞ」

——磯ガニさんは静かにしてください。

「そりゃ俺の芸術作品のことだ。素晴らしいが大金にはならねえよ」

「そんな」

青年が天を仰ぐ。真つ赤な夕焼けが、彼には絶望の色に見えたのかもしれない。肉厚な手で顔を覆って、深くため息をついた。

「……高額報酬のバイトをネットで見つけて、応募したんです。『だれにもできる簡単な仕事』ってあったから。でも、いざ送られてきた仕事内容を見たら、犯罪だろこれ、ってやつで……」

「今なら引き返せるぞ」

鎌田さんが告げる。青年は顔を覆う両手をほどいて、首を横に振った。

「応募したとき、雇い主に個人情報を送ったんです。途中で降りたら、なにをされるかわからない。逆らえないけど、実行したらどうせ捕まるから……そういうの、ニュースでたくさんやってるから。」

だから、だれも傷つけず、気づかれないうちに済ませるやり方を、もうひとりの人と考えたんです」

「それで、孫の役かあ」

「すみません、すみません」

青年が涙まじりに頭を下げた。

「そんなに金が必要だったのか？」

「欲しいゲームとか、いろいろあつて……」

「ゲームかあ。許せねえなあ。しっかり傷ついただけ」

「すみません、すみません」

波音の隙間を、青年の嗚咽おえつが埋めていく。彼はほぼ崩れ落ちるようにしてわたしから降りると、砂浜に額をこすりつけた。

「ごめんなさい。許してください、ごめんなさい」

ひつ、と悲鳴を漏らしたのは磯ガニだ。どうやら彼のすぐそばに、青年の泣き顔があるらしい。

——鎌田さん、そいつを縛りあげ、海に放つて、波に運んでもらいましょう。漂着先で、よい流木に生まれ変わるかもしれません。

そこまで告げて、ある思いがよすぎる。もしかしたらわたしというやつは、罪を犯して海に流され

た悪人だったのでは？

「謝られたところで俺の傷は癒えねえが、おめえの傷を増やさないようにはできるだろ。警察に助けてもらえ。俺はおめえからなにも盗まれてない。おめえは犯罪者じゃない」

「おおーい、鎌ちゃあーん！」

後方から、のどかな声でした。見れば海沿いの道に、緑のバンダナ頭が見える。佐々木さんは、見知らぬ茶髪の青年と密着していた。青年は、魚とり網の柄を首元に当てられた状態で、後ろから佐々木さんに羽交い絞めにされている。

佐々木さんが声を張った。

「どれ見たかあー！ 宗助が来るって聞いたときから怪しい気がしたもんで、今日は見張ってたもんねー！ そいつはおめえの孫じゃねえ。強盗！ そして、こいつは仲間！」

魚とり網の圧迫を受けて、茶髪の青年が「うぐえつ」と呻いた。

身体を起こしてその様子を見ていた偽宗助君が、再び砂に沈む。脱力した彼から、ほどなくして少年のような声が発された。

「あ、カニ」

「ぎえっ！」

磯ガニが叫んだ。わたしの陰に潜んでいるところを、見つかってしまったらしい。

青年が、気の抜けた声で呟く。

「昔はこういう生き物を見て、楽しんでるだけでよかったのにな」

わたしから降りた鎌田さんが、ポケットから取り出したものを青年に差し出した。

「やるよ」

それは夕日の色を透かして、うっすらオレンジ色に発光している。

青年が目をまるくした。

「なんですか、これ」

「黒曜石。魔除けとか厄除けのお守りになる。この海岸で拾えるんだ。貴重な自然の一部だから、普段は拾わないようにしてるんだが、孫にやろうと思つてな。でも、おめえのほうが必要そうだ」

「……すごい。鎌田さん、本当に厄を除けましたね」

力なく笑う青年が、鎌田さんから光の粒を受け取った。

翌日。鎌田さんは海に来なかった。代わりにわたしのまわりには、人間の子供がいる。彼らは、細い流木でわたしを殴りつけてくる。

「くらえっ！ 高速切り！」

「樹形巨人め！」

「巨人は首の裏が弱点なんだぞ」

「こいつの首、どこ？」

わたしには首も顔も目も鼻もない。でも、じゃあわたしって、なに？ 人間のような目もないのに、なぜ世界が見えるのか。耳がないのに、どうして言葉がわかる？ ありもしない胸が痛むのは、なぜ？ わたしの意識は、いったいどこから来ているのだろう。

「やめなよ。心があるかもしれないよ」

口を開いたのは、唯一、樹形巨人狩りに参加していなかった少年。彼は気弱な口調で、言葉を続けた。

「じいちゃんが言ってたよ。長いあいだ大切にされてきたものには命が宿るんだって。その木、しみじいさんが大切そうに撫でてるもん。心が宿ってるかもしれないよ」

心。

光に透ける黒曜石のように、一瞬にして世界が明るくなった。

流木として目覚めてからの記憶が、鎌田さんと過ごした日々が、わたしの内側を満たしていく。

子供たちが叫んで逃げていくなか、わたしも歓喜の悲鳴をあげた。

——そうでしたか、鎌田さん！ 少年の言葉が真実なら、あなたの愛情が、わたしに心を宿したのです。あなたの会話から、わたしは世界を知り、言葉や知識を吸収していったのです。

それはきっと、流木として目覚める以前から。鎌田さんと宗助君が、わたしに座っていた時代から。——わたしの意識は、わたしの心からきているのです！

ひとりだけ残っていた少年が、わたしを撫でた。わたしをかばった、さっきの少年。

「ぼく、佐々木だよ。いつもじいちゃんを座らせてくれてありがとう」

——そうでしたか。あなたは佐々木さんの——。

「げっ、あのうるせえバンドナじじいの孫かよ」

ぼやく磯ガニのすみかは、昨日から、わたしのちいさな空洞内になった。

少年が、につこり笑って駆けていく。ひょうきんな顔に少しだけ、佐々木さんの面影を見た。

翌日の海は荒れていた。灰色の波が押し寄せては、消波ブロックに激しいしぶきをあげている。濁った空は、もうじき雨を落とすだろう。砂を巻き上げる強風は、わたしに粉じんを浴びせ続けている。

そんななか、波打ち際の生き物はこれ幸いと雄叫びを上げていた。

「高波チャンス！」

「高波チャンス！」

海へ引き戻してくれるかもしれない大波を、浜辺の生き物たちは「高波チャンス」と呼ぶ。波に打ち上げられた状態で弱り、海へ帰れずにいたナマコや貝も、このときはかりは力をみなぎらせる。衰弱した状態で海へ戻っても、生き延びられるかはわからない。それでもみんな、故郷に帰りたのだ。

波打ち際の熱が増すなか、鎌田さんがやってきた。曇り空の下、彼の表情は陰って見える。今日は珍しくバケツを持っていない。手袋や長靴の装備も不十分。いつもと違う点はそれだけじゃない。砂浜を訪れるなり、彼はわたしに座った。そしてだれもいないのに、しゃべりだした。

「……電話があつたときから、変だと思つてたんだ。宗助がひとりで俺に会いに来るなんて」
鎌田さんに撫でられて、わたしは察する。

——鎌田さん、もしかして、わたしに話しかけているのですか？

「お前に座ると、隣に宗助がいるような気分になる」

鎌田さんは語り出した。仕事がうまくいかなかった時期に、酒に酔って家族に強く当たってしまったこと。その積み重ねが原因となって、みんなが自分の元を離れていったこと。

「酒に溺れるくらいなら、海に溺れりゃよかったよ」

わたしは、やるせない気持ちに襲われた。

——人の心は、海のようなものですね、鎌田さん。

海は波をコントロールできない。海中にどれだけ優しい世界を秘めていようと、外側に表れる脅威が、ときにあらゆる命を脅かしてしまう。

——だからこそ、防波堤は作られるのですね、鎌田さん。

人が海を愛し続けられるよう。海が人を傷つけず済むように。

では、人間同士の防波堤はどう築けばいいのだろう。

愛しながら、離れて暮らすこと。もしかしたらそれが、鎌田さんと家族を仕切りながらも繋げる防波堤になるのかもしれない。

そんなふうに思っただけで、言えなかった。鎌田さんに告げるには、寂しい言葉のように思えたから。

「海にはいろんなものが流れ着いてくるよな。綺麗なものも、汚いものも、感情の欠片みたいに。自分が吐きだしたもので、綺麗だった景色を汚しちまうんだから、海も滅入るよな。まわりだって、見たくねえよな」

——鎌田さん、もしかして、あなたは海と自分を重ねているのですか？ だから毎日、漂着物を拾うのですか？ 愛する場所が、美しい姿を取り戻すよう……おっと、雨が降り出しましたよ。

大きな雨粒が砂浜を弾いていく。やがて無数の雨音に一带を埋め尽くされても、鎌田さんはわたしに座ったままでした。

鎌田さんが歌いだす。

しみじみおもう、しみじみと。おもいでだけでいきてゆく。

海が荒れた日ほど、鎌田さんは大声で歌う。浜辺の生き物から「悪魔の讚美歌」として恐れられる、しみじみの歌を。

しかし絶好の高波日和の今日、みんなの意識は海に逸れていた。

「いけーっ！ 波にのまれろーっ」

「高波チャンス！」

「高波チャンス！」

砂浜では、磯ガニやフナムシたちが熱い声援を送っている。

雨粒とは別の感触が、わたしにぼつりと弾けた。やけに繊細で、ほのかに温かな雫をこの身に沁み込ませて、気づく。

——泣いているのですね、鎌田さん。

おもいでだけで、いきてゆく。

大切な景色や大切な人たちは、どんどん姿を変えて、いつか遠い存在になるかもしれない。けれど、それぞれの心のなかに、愛する姿のまま残り続けている。その景色だけは、なににも遮られない。

——宝物の景色が、鎌田さんにもあるのでしょうか。家族と海辺を歩くあなたは、とてもしあわせそうでしたもの。鎌田さん、その美しい記憶を、額に収めて心に飾りましょうよ。額縁に、わたしの一部を使ってもいいですよ。

豪雨のなか、海は荒れ、生き物たちはたぎり、鎌田さんは歌う。バラバラの音階が、壮大な音楽を作り上げていく。

「高波チャンス！」

「高波チャンス！」

しみじみおもう、しみじみと。

「高波チャンス！」

「高波チャンス！」

「いけーっ！ 海へ戻れーっ！」

おもいでだけで、いきてゆく。

——鎌田さん、わたしはあなたに拾われなくてもいい。あなたがつらく悲しいとき、寄り添える存在でありましょう。人生を歩き続けたあなたを休ませる、唯一の流木となりましょう。大丈夫ですよ。わたしはここを離れません。

翌日。鎌田さんはいつもより早い時間帯に砂浜を訪れた。思いきり涙を流した次の日は、空も人の心も晴れるようだ。鎌田さんのすつきりした顔は、少しだけ若返って見える。

一方で、海は切り替えが下手だから、波打ち際には今日も祭りの余波が続いている。「プチ高波チャンス！」のコールは、鎌田さんの接近によって途絶えた。

「鎌田のじじいが来たぞー！」

磯ガニの叫びによって、波打ち際に混乱が生じる。フナムシが飛び交い、ナマコが身をよじった。

「悪魔だあー！」

「みんな、散れーっ」

「波よ、波よどうか！」

しばらく周辺を探索していた鎌田さんが、背筋を伸ばした。腰に手を当てて、背中を後ろに反ら

している。両腕をぐるぐる回して、悪魔のダンスを終えたなら――。
――さあ、休憩ですね、鎌田さん。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

海が運んでくれた物語

位ノ花 薫

才能ないんだ。もうやめようかな。でも書きたいな。

そう考えていた何年前か前、初めて最終選考に残していただけた文学賞が、ふるさと秋田文学賞でした。

もうちょっと頑張ってみようかな。と思えたあのときの経験が、今に繋がっています。そして今回の経験が励みとなって、またいつかへ続いていくのだと思います。ふるさと秋田文学賞は、私が感謝している文学賞のひとつです。

私は栃木に住んでいます。秋田には祖父母の家があり、子供時代は夏休みや冬休みに遊びに訪れていました。小説を書く日々を過ごすなかで、秋田の思い出があるからこそ生まれた物語がいくつもありました。

『流木と悪魔』は春に秋田を訪れた際、砂浜で発見した超巨大流木と、作り途中の防波堤を見て思い浮かんだ物語です。

晴れの日の海岸には、ビーチコーミングをする人の姿がちらほら見え、波打ち際にはナマコや牡蠣や名前のわからない海洋生物がたくさん落ちていました。タコがまるごと落ちていたのは驚きです。そんな混沌とした波打ち際の様子も、物語に溶け込ませました。その日、拾った流木と黒曜石は、ハンガーとウインドチャイムにして部屋に飾っています。目にするたび、秋田の海を感じられて愛おしいです。

作品について、選考委員の先生おふたりからは続けて「タイトルがよくない」とお言葉をいただきました。この先、小説を書き続けるなかで、時間をかけてタイトルと向き合っていこうと思います。貴重なお言葉をいただき、ありがとうございます。

緊張してのぞんだ表彰式は、案内をしてくださった方々の、にこやかさや優しさに心救われました。素敵な受賞者のみなさまとお話ができたこと、とても嬉しかったです。またひとつ、大切な秋田の思い出が増えたことに感謝いたします。

主催者のみなさま、選考委員の先生方、この度はありがとうございました。

秋田で暮らす人々の毎日が、心穏やかなものでありますように。

第12回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

ピ
ユ
ア

ピ
ユ
ア

七月の新幹線はキンキンに冷えている。小ぶりのポストンバッグを通路側の座席に置き、窓際にどすんと腰を落とす。首周りの汗をタオルハンカチで拭う。新幹線に間に合うよう東京駅のグランスタからホームへの階段をほぼ全速力で駆け上がった。元陸上部という肩書きも、五十という年齢を前にすると交換期限がとつくの昔に過ぎた三等当選宝くじみたいだ。膝がガクガクしている。

顔は汗をかいていなかった。先週化粧下地を変えたら滝汗がぴたりと止まった。化粧品は同じものをなくなるまで使うたちで、夏菜子は三年くらい同じものを使っていた。新製品が出たと言っては毎年買っている若い女子社員を横目で見ては、もつたいなあと思っていたが「夏菜子さん、ほんと騙されたと思つて新しい下地買つてみてください」と言われて彼女のおすすめてを買つてみたら、本当に汗で化粧が崩れることがなくなった。この数年、日本は六月半ばから亜熱帯と化す。もつと早く買い替えるべきだった。美容ネタは若い人の意見を素直に聞くに限る。

「おしやれする暇あるだば、勉強しなさい」

母悦子の口癖であり、長い間夏菜子のマントラでもあったフレーズが、頭の中でどんどん小さな級数の活字になっていく。これの存在価値が薄くなつて夏菜子の意識から葬られる日と、自分がリアルに老眼になる日では、どっちが先に来るのだろうか。

二〇時十六分発、秋田行きの最終新幹線は六割くらいの乗車率だった。出発するや否や、プシュッ

と缶ビールを開ける音が輪唱するように聞こえた。

乾杯をしている男性二人組は、東京への出張を終えて、盛岡や秋田へ戻るビジネスマンだろう。「おづがれさまです」という発音に、タスクを終えて気持ちはずっかり地元にあることがわかる。

男女のペアも数組いた。ドアから自席にたどりつくまでにチラ見した限りでは、いずれも夫婦ではなさそうだった。金曜夜なので、出張先に赴く二人ではないだろう。本社が東北にあつて東京出張から戻る年齢の離れた二人組、あるいは不倫か訳ありな関係。十年くらい前は自分も、その訳ありの片割れだったこともある夏菜子は、彼らを非難するつもりは全くなかった。年がひと回り以上離れた、同じ会社の役員だった。季節の旨いものを食べに行くかと新幹線で隣り合つて京都に向かう映像が頭の中でカタカタ再生された。

新幹線がすれ違う際のシュアンシュアンシュアンという音がして、現実を引き戻される。灯りのついた中小ビルが、荒川を越えたあたりから八階建てくらいのマンション群に車窓担当のバトンを渡し、無機質なLEDの光が、白かったり橙だったり住む人の息吹が聞こえそうな色に変貌する。「早くお風呂に入りなさい」「宿題すんだの？」母親たちの黄色い声が聞こえてきそうな灯り。町は寝る前の支度を開始している。

“母さんのことで話したい。何時に電話していい？”

妹の早苗からLINEが来たのは十六時ごろだった。珍しかった。年は三つしか離れていないが、かたや秋田に暮らす三児の母、かたや東京の中堅広告代理店に勤める五十歳独身、管理職。

早苗は母に似て肌が白くて美人と言われていた。夏菜子は年中グラウンドを走っていたので肌は浅黒く、顔つきは父親似。目は一重で、顎の骨がしっかりした男顔だった。女性同士の話題は高校時代の立ち位置で決まる。陸上部プラス勉強に全てをかけた夏菜子と、学年一可愛いとまではやされた早苗は、仮に同じクラスだったとしても話さなかつただろう。冠婚葬祭だけが姉妹を再結成させる理由で、前回顔を合わせたのは、四年前に独身で病死した叔母さんの葬儀だった。母は早苗にばかり話しかけ、黒い着物を着た二人で全てを仕切り、黒スーツの自分は全く蚊帳の外だったと夏菜子は鮮明に記憶している。

十七時になって夏菜子の方から電話をかけた。すると、

「よかった。電話もスルーされるかと思った」と開口一番に言われた。「お母さんが一晩中あたりを徘徊してたらしく、さつき警察から保護したと電話があつたの。倒れて顔を打って流血騒ぎになって、今病院にいる。私もさつき着いた。これからのことを話したい。秋田に来れるかな。詳細は会ったときに話す」と早苗は、今まで溜まっていた澱を吐き出すようにまくし立てた。

ついに私にもこの時が来た。夏菜子の脳裏に最初に浮かんだ気持ちだった。ごくりと気づかれな

いように息を呑む。

「わかった。今日中に着くようにする。新幹線乗ったら連絡するわ」

動揺を姉のプライドでフタをして、電話を切った。そんなプライドなど長い間使う場面もなく、すっかり錆びついていたが、母の事件がその錆をふるい落としてくれた。

定時で退社しマンションに戻り、秋田行きの準備をした。都内の一人暮らしで、犬も猫も飼っていない。数日留守する前のトポリストがあるとすれば、冷蔵庫の中で腐りそうなものを処分する、バルコニーの植物に水を多めにやる、それくらいか。場合によっては秋田滞在が土日プラス月曜になるかもしれないと思い、下着は三日分持った。着替えはカットソーの上下セットアップ一つと最小限にした。見た目を気にしなければ、最悪実家にあるだろう三十年落ちの衣服を着れないわけではない。

新幹線はちょうど大宮を通過するところだった。秋田着は予定。そのまま実家に向かう。病院じゃなくていいよね？と早苗にLINEしたら、了解。母さん引き取って大仙のうちに連れてきてる。遅いから翌朝にそっちに行くわ。とりあえず今晚は寝て”というメッセージと、アライグマが寝落ちしているスタンプが速攻で来た。

最近の新幹線は車内販売がない。東京駅構内のグランスタでお弁当を物色し、ハイボール缶を買っ

ていた。階段を駆け上がったから、乗車してすぐ缶を開けると中身が吹き出すだろう。大宮を過ぎたあたりで開けるとちょうど良いと、走ることの多いサラリーマンならわかる、他の場面には全く役に立たない計算だけはしていた。

プシュッとハイボールのプルトップを引いた。泡は吹き出さずにすんだ。夕方以降のゴタゴタを黄金色した液体が全て流してくれるよう祈りながら喉に通した。

正方形の黒い箱を開ける。お重を意識している小洒落た箱。九つに分かれた区画に酒の肴がちなまり九品、ご飯はない。お腹の周りがだぶついてきたので数年前から夜にご飯粒を食べるのをやめた。枝豆に豚の角煮、山菜の煮付け……こういう品が東京駅にあるということは、同志がこの街のどこかにいるという気になってちよつと嬉しかった。ダイエットだけでなく、新幹線に乗って、ひとり酒の肴を味わう環境にある同士が、鯖の味噌煮は一口で食べるには惜しく、四回に分けて味わう。倒れた親の元に駆けつける、親の介護で郷土に戻る。そんな理由を背負っているのは、この車両では私一人だろうか。いやいや、会社でもよく大阪にいる母親の面倒を見るから月に二回帰ると言うていた先輩がいたし、父親をホームに入れたと言う同期もいた。その割合を考えると、車内にもう一人くらい介護の同士もいるんじゃないか。人に頼ることが得意じゃない夏菜子は、そう考えることで自分の気力を維持する。

「お客様、終点秋田です」

トントンと肩を叩かれた。目を開いた。制服姿の女性乗務員がそこにいた。すっかり寝落ちしたらしい。

「お忘れ物のないように、お降りください」

目の前の弁当ゴミと、缶、ポストンバッグを掴んで慌てて車両を降りた。ケータイと財布は体に斜め掛けしてあるボディバッグに入っている。ドアが閉まり新幹線は動き出した。駅ホームでの点検はせずに、車庫に向かうのだろう。

駅前のタクシーはラスト一台だった。秋田駅に着く在来線は二十三時三十六分を過ぎると、もうないはず。金曜夜、配車も駅前より飲み屋街に集中する時間だ。危ないところだった。最後のタクシーに乗り込み、

「大町一丁目までお願いします。あの有名な割烹の近くに來たら、教えてください」
と実家までの指示を出した。

車の窓を開けて、目を閉じた。秋田は都内より涼しいが、湿度は割と高めである。一年通すと東京よりむしろ高いくらいだ。湿度があるから肌が乾燥せずに、秋田美人が生まれるのだという説がある。それより、人々の何もかも知っておきたいという好奇心や、羨ましいやお気の毒といった情

念が濃いせいで空気が湿気っているのだ。夏菜子は勝手にそう思い込んでいた。

ちよつと目立つといろいろ詮索されて、噂になる土壌。あの子は男まさりだから、秋田じゃ結婚するの難しいんじゃないか。そんな余計な心配も耳にした。高校を終えたら絶対東京に行つてやる。大学に現役合格した。大手を振つて秋田を後にした。十八歳のことだった。

千円ちよつとのタクシー料金を現金で支払い、自宅の門を開けた。木製のそれは、ギシギシと嫌な音を立てて開いた。父が十年前に脳溢血で他界してから、こういうところをメンテナンスする人がいないのだろう。綺麗好きな母も、外装には無頓着なのではない。

鍵をポストンバッグから出して、玄関の鍵穴に差し込む。しかし差し込めない。「やだ」慌てて間違つた鍵を持ってきたのだろうか。スマホを出して、トーチライトをつけて確認する。間違いない、実家の鍵用につけていた銀色のリボンのキーホルダーだ。高校時代に愛用していた、でも都内で大人が使うには恥ずかしいタイプのキーホルダー。鍵穴を上げ上げ眺める。全く違う鍵一式になっているではないか。

さて、どうするか。不思議と腹は立たない。夏菜子は疲れているが冷静な頭で考える。駅の近くのホテルに泊まる。しかしこれから予約を取るのには面倒臭い。早苗に電話をかけて彼女の家に泊まらせてもらう。しかし彼女の家族が住むのは秋田市内ではなく大仙市だいせんなので、タクシーで

向かうにはちよつと距離がある。この時間で車で迎えに来てとは妹でも言えない。高校までの友人とは、この数年連絡が途切れている。隣人の家の扉を叩いて頭を下げるのは、子供の頃から仏頂面を貫き、ご近所とは挨拶以外言葉を交わしたことのない夏菜子には、ありえない選択だった。

「あ、物置」

夏菜子は思わず声に出していた。荷物を玄関の前に置いて、左にある物置目掛けて飛び石の上を歩いていく。飛び石は突然途切れて、そこからは雑草が生い茂っていた。虫もいるに違いない。夏菜子は、スカートでなくパンツで来たことを不幸中の幸いだと思いながら歩いた。

プレハブみたいなつくりの物置は、相変わらず同じ場所に鎮座していた。どうか鍵がかかっているまいかとお祈りをし、扉に手をかけて引つ張った。ガガガと鈍い音を立てて、開いた。モワーンとした空気が夏菜子の鼻腔を襲う。トグロを巻いて待機していた何年分もの埃が、わーいと声を上げてはしゃいでいるみたいだった。

スマホのライトで中を確認する。自転車が二台、庭の手入れをするスコップやバケツ、使わなくなった植木鉢、ホース、ブリキの箱がそこにはあった。

「もう一時近い。早苗が着くまでの数時間、ここで眠ろう」

夏菜子は自分に言い聞かせて、自転車を外に引つ張り出した。そしてハンカチで口の前を覆つて後ろで縛り、埃を吸い込まないようにした。体育座りをし、肩の力を抜く。屋外の物置で寝るなんて、冬の秋田だと無理な発想だが、七月だし、例年より暑いので大丈夫だろう。物置の扉を半開きにしたまま夏菜子は目を閉じた。少し開けておけば、朝になったら早苗が気づいてくれるだろう。金曜朝からの労働と、早苗がLINEを寄越してからのドタバタは、夏菜子をあつという間に眠りの沼に沈めた。

「ちよつと、お姉ちゃん起きて」

軽やかな声が真正面からする。早苗だった。物置の扉はすっかり開いて、光が差し込んできていた。

「なんで、こんなところで寝てるの」

「なんでって、玄関の鍵が入らなかつたからじゃん。変えたの？」

寝ぼけ眼を擦りながら、夏菜子は答えた。

「あ、そうだった。ごめんね。ねえ、マスカラ落ちて、目の下クマになってる」

「そんなことより、私の疑問に答えてよ」

パンツの尻をはたいて夏菜子は立ち上がった。身長が一六八センチある夏菜子に急に見下ろされ、早苗は、

「悪い悪い。鍵のこと伝えるの、すっかり忘れてた。中で話すわ」と、申し訳なさそうに肩をすくめて玄関に向かった。

玄関の前には、母が手持ち無沙汰な感じで立っていた。年の割には若い無地のカットソーとパンツを身に着けている。母と同じ小柄な体型の早苗が自分の衣服を着せたのだろう。瞳は挙動不審者のように彷徨っている。額と左頬に大きなガーゼが貼ってある。転んで派手に顔を地面に打ちつけて、病院で処置してもらったのだろう。左目の下が紫になっている。

挙動不審者は夏菜子を見るなり、

「あれ、どちら様？ どうした？ まなぐの下、黒ぐして、叩かれたの？」

と手を伸ばしてきた。私のことわからない？ 叩かれたの？ どう対応していいかわからず夏菜子が眉を顰めると、

「いいから早く家の中入ろう」と早苗は言っ、顎で中を示す。「お姉ちゃん、玄関に荷物置きっ放しにして、泥棒に取られたらどうするつもりだった？」

そして母の靴を脱がせて、真っ先が上がらせた。母は「ただいま」とまるで中に吸い込まれるように前のめりになって奥へ入って行った。

「だって、ここ秋田だし。こんなとこまで泥棒入ってこないでしょ」

夏菜子が拗ねた口調で答えると、

「そこなの、そこ。これから話す」と早苗は神妙な顔つきになった。「喉乾いたでしょ。お茶淹れてくるね」

台所で淹れたお茶をお盆に乗せて、早苗が戻ってきた。

居間のちゃぶ台を挟んで、二人は座った。夏菜子は久しぶりの正座に慣れず、パンツを引っ張ったり、折り畳んだ足の腿を撫でたりする。

「座布団持つてこようか。それとも少し横になる？ 疲れたでしょ」

「大丈夫。元アスリートだし、すぐに足も慣れるでしょう」

「了解。で、お母さんだけどね」

「もしかして、ボケてる？」夏菜子は躊躇せず突っ込んだ。「あ、聞こえちゃうかな」

夏菜子は人差し指を唇に当てた。

早苗は後ろを振り返りながら、

「あっちの部屋のお父さんのロッキングチェアに座ってるから、大丈夫。午前中はあそこで大抵ボーっとしてる。午後には戻るんだけど」と言った。

「そうだねえ、一年前からかな、時々こっち来ると、台所にゴミ袋が溜まってるわけ。聞いてみる

と、ゴミ捨てる日間違えた、だから持つていってもらえなかったって言うの」

「お母さん、綺麗好きだったよね？」

「でしょ！ あと急にキレて怒り出したりするのよ。ある日曜、うちの次男坊がばあちゃんのハンバーグ食べたっていうから、こっちに連れてきたんだ。そしたら出来上がったものが、形は崩れてるわ、味はトンチンカンだわで、外側はお母さんなのに、中に別人が入ってるんじゃないかと思っただよ。で、お母さん、レシピ変えた？ って聞いたら、形相変えて皿を床に叩きつけたんだ。私たちがオロオロしながら片付けてたら、ハンバーグって、どうやって作るんだっかって申し訳なさそうに言うの。で、これはヤバいと思って、翌日朝イチで病院に連れて行って診てもらった」

「それで？」

夏菜子は息をのんだ。

「まだら認知症だつて」

「どういうこと？」

意味をなかなか咀嚼できない夏菜子だった。

「えっとね、脳の血管が詰まって神経細胞への血流が不足することで、脳の働きが疎かになるんだつて。で、記憶がぶちぶち途切れる。お母さん、運動しないし、しょっぱいもの好きだから高血圧で。」

それも良くないみたい。でも私がいるときは、大丈夫だったし、介護認定を受けると、その時は普通にしているから介護必要なしになるのよ。だから施設には預けられない。デイサービスも受けられない。怖いから一週間に一度こっちに来て、ゴミが溜まってたら捨てて、郵便物を整理して、公共料金とかを払ったりしてた」

「そうなのか……全然知らなかった。全部早苗任せにしてた。ごめんなさい」

「いえいえ、お姉ちゃん忙しいの、知ってたし。そもそも秋田に帰ってくるの、嫌だったでしょ」
凶星をさされた。表情が固まるのが夏菜子は自分でもわかった。

「……。で、鍵はどうして使えなくなったの？ それを知りたい」

「お母さん、すぐ鍵を無くすようになったんだ。症状出始めの時は、鍵どこだっけ？ って、うちに電話がかかかってきたんだけど、一緒に暮らしてないからわかるはずない。でしょ？ そのうち自分でも恥ずかしくなったのか、鍵かけずに外出するようになった。それがわかってから、鍵はいつも首にかけておこうね、って長い鎖をつけたんだ。あれは半年前だったかな、家を出て、帰る場所がわからなくなったみたいでさ。警察から悦子さんを保護しましたと連絡があった。まだらボケが外で出たんだね。で、警察の人に、みなさん衣服に住所と名前と連絡先を書いたものを縫い付けてますよと言われたからそうしてみた。その後も一度、お母さんあたりを徘徊したことがあった。そ

の時に首の鍵も無くしちゃって。近所をお母さんと歩き回って探したんだけど見つからない。まあ、しょうがないかと放っておいた。そしたら一か月くらいして、家に泥棒が入った。たぶん鍵を取った人が、住所も見てたんだろうね。酷いよね。認知症老人の家に入るなんてさ。たまたまお母さんがいなかった時だったのが不幸中の幸い。現金の被害は大したことなかったけど、真珠のネックレスとか指輪とか、あとお姉ちゃんの高校の制服も盗まれた。ほらA高の制服って、セーラーとブレザーと組み合わせたって可愛いじゃん。時代を超えて」

「え、なにそれ。気持ち悪いんだけど。ていうか、カビ生えてなかったかな、制服」
早苗は夏菜子をスルーして続ける。

「お母さん、お姉ちゃんの部屋、高校卒業の時のままにしてたんだよねえ……びつくりでしょ。私の部屋なんてもう残ってないのに……そんなこともあって怖くなったから、慌てて鍵を付け替えたってわけ。お姉ちゃんはしばらく帰ってこないだろうし、次に秋田に戻った時に、事情を話して新しい鍵を渡せばいいと軽く考えてた。それが裏目に出た。まさかこんなことになるうとはね」

「秋田も変わったんだ……」

「うん。なんか、余裕がなくなってきた。若い人も、ギリギリのところやってる人が増えてると思う。ひったくりとか空き巣とか、小さな犯罪は増えてるらしい」

「昔はそんなことなかった。野菜も果物も秋田でたくさん取れるし、市内を離れると道端に『持つて行つて下さい』とか書いて置いてあつたよね。お金がなくても、みんなわかつてゐるから、つて助け合う感じがあつた。ま、私はそういう人付き合ひの濃さが、嫌でもあつただけだ」

「知つてる」早苗は、自分が姉のような顔つきになつた。「それでね、お姉ちゃん、ご相談。秋田に戻つてきて、お母さんと一緒にここに住んでくれないかな」

「え……」

夏菜子は言葉に詰まつてしまつた。

「この一年、私、毎週ここに来てたんだ。でもね、今年は息子二人受験生抱えて弁当を一日四個つくつてるし、あ、塾の分ね。でき、末っ子の長女はまだ幼稚園なわけ。この歳だよ。お風呂入れたあと、水飲ませて、髪の毛乾かして、みたいなこともう三周目。その上幼稚園の送り迎えもして、もう限界なんだ。旦那は名譽お父さんだから何もしてくれないし……あ、もちろん今すぐ返事しなくてもいいからね。じっくり考えて欲しい」

早苗は地元の専門学校を出て保母さんになり、二十三で高校から付き合つていた同級生とさつさと結婚した。信用金庫に勤める夫は毎晩飲みで帰りが遅いとよく愚痴つていた。秋田の男性はまだまだ封建的などころがあり、家事や育児を手伝つてくれる割合は、首都圏に比べるといまだに低い。

あらためて早苗を眺める。肌には結構細かいシワがあった。髪も前回染めたのはいつだったんだろうと思わせるくらい、生え際から三センチほど白髪になっていた。夏菜子は、誰にも遠慮することなく毎月美容院で髪を染め、二ヶ月に一度フェイシャルエステに通える時間を持つ自分が、急に恥ずかしくなった。

「お母さんは、どうなの？ 私に面倒見られるのは嫌なんじゃないかな」

「どうしてそう思うのさ？」

「だって昔からお母さん、いつも早苗は私に似て愛嬌があるからって可愛がって、私にはあまり話しかけてくれなかったじゃん。無駄話の時間すらもつたいたない、みたいにいつも距離を置かれてた。それに貴女みたいに中学に入ってからお母さんと一緒に洋服を買いに行ったこともないよ」

「お姉ちゃん、わかかってないなあ。頭はいいのに、全くわかってない」早苗は夏菜子をまじまじと見つめた。「白状しますけど、私は密かに、新しい服が欲しいなってねだった。お姉ちゃんはその代わり、本買って、だったじゃない」

指摘されて、夏菜子はハツとした。

「お母さんのとこ、行こう」そう言って早苗は立ち上がった。

久しぶりに正座をしたので、夏菜子は足が痺れてしまい動けないでいた。

「ちよつと待つて」と片足を立てて、そのままの格好でじつとする。少し経つて夏菜子は早苗の後を追った。

「お母さん、お姉ちゃん、来たよ」早苗が声をかけた。

「お母さん、顔、痛くない？ 大丈夫」と夏菜子が話しかけると、母はロッキングチェアに座ったままピンと背筋を伸ばして、

「あら夏菜子、どうしたの？ 会社は忙しいんですよ。部長さんだもんね。よく来てくれました」と自分の顔のことなどすっかり忘れて気遣つてくれる。

朝、玄関で他人扱いされたのが嘘のようだ。今は七十三歳の母悦子に戻っている。五年前に部長になったことを覚えてくれていた。

「さつき新幹線で来た。お母さんの好きな東京ばな奈、持ってきました」

「まあ、嬉しい。いただきましょう。お茶淹れるわ。」

母は立ち上がつて、台所へスタスタ歩いて行く。

「今はちゃんとしてる。普通のお母さんに戻った。この魔法がいつまで続くかなんだけど」早苗は夏菜子の耳もとで囁いた。「ちゃぶ台からお茶碗と急須、さげてくるね」

保母をしていただけあって早苗はよく気が利くし、冷静だ。夏菜子は改めて感服した。

立ち上がって、玄関の取次に置いたままにしていたボストンバッグを居間に取りに戻った。三和士には三人の靴が脱ぎっぱなしで、あちこちを向いたままだった。昔だったらお母さんに怒られたなあとthinkながら、夏菜子は上半身を折って、靴をきちんと揃えた。

バッグを居間に持つていき、中から東京はな奈の黄色い箱を二つ取り出し、ちゃぶ台の上に置いた。早苗は縁側で電話をしていた。土曜日だし、家にいる子供たちに指示を出しているようだった。お茶の準備がそろそろできたかもしれないと、夏菜子は台所に足を運んだ。ここでは、コンロの前に母親が立ち尽くしていた。

「お母さん？」と声をかけると、

「あの、私はいま何をしようとしたのかしら？」と縋すがるような目で見られた。

「一緒にお茶を淹いれようか」夏菜子は精一杯の微笑みを浮かべて答えた。「お茶っ葉はどこにあるんだっけ、お母さん」

夏菜子が聞くと、

「あらやだ、こっちの棚の中。いい加減に覚えてね。お姉ちゃんなんだから」とニコニコしながら母が言う。人格がくるくる変わる。夏菜子はやかに水を入れてコンロにかけ、お茶いれから茶葉を出して、さつき使用した急須の中の茶葉を入れ替えた。

「どうした？」

居間から早苗の声がした。夏菜子は慌てて近寄り、何が起きたかを話した。すると、

「しょうがないんだ。十秒前のことを忘れちゃう。しょっちゅう。そういうものと割り切るしかない。でもね、お風呂に入ったたり、洋服を着たり、若い時に体が覚えた身の回りのことはちゃんとできる。残存機能っていうらしいんだけど、そこは大丈夫なのが救い」

「そっか。お茶持ってくる」

夏菜子は母のいる台所に戻った。母が淹れてくれたお茶をお盆に乗せて、一緒にちゃぶ台に来た。ボストンバッグから、黄色い箱を二つ取り出して、一つ母に渡した。

「お母さん、東京のお土産。好きでしょ、東京ばな奈」

「ありがとう。早速いただきますよか」

そう言っ母は黄色い包装紙をビリビリと激しく破いて、箱からはな奈を取り出した。

「お持たせですけど、召し上がって」と、それぞれの前に個包装を置いた。

「お持たせなんて言葉、百年ぶりに聞いた。東京じゃ誰も言わない。なんかいいよね」

夏菜子の反応に、二人はクスクスと楽しそうに笑った。

東京ばな奈を食べ終わってから、母はテレビをつけて、バラエティ番組を見出した。

その姿を確認し、安堵した夏菜子は縁側に行く。足をぶらぶらさせながら、庭の木を眺める。羽扇うちわ楓は小さな緑の腕をのびのびと広げて自由を満喫しているように見える。この木は夏菜子が生まれた時に植えたと聞いていたが、果たして同じ木だろうか。五十年生きてきたのだろうか。もしそうなら自分が家を出てからの三十年と少し、どんな光景を見てきたのか教えてほしいと夏菜子は思った。

横にいる早苗に言うでもなく、しみじみつぶやいた。

「木もボケたりしないのかな。たとえば夏に紅葉するとかさ」

「それ。ぜんぜん笑えない」

「まだらボケとはよく言ったもんだね」

母について言及する。

「でしょ。わたし、最初は戸惑ったけど、命名した人に感動すら覚えた。ほんとにまだらなの。七十年以上生きたお母さん、と三歳児の悦子ちゃんを行ったり来たりするんだ」

早苗の声は、まああるく転がり、不純物が混じっていない水のように耳に心地よい。だからストレートな物言いにしてもキツク聞こえない。そこは自分と大きな違いだなあと夏菜子は羨ましく思う。

「でね、お姉ちゃん、今日二時から次男の野球大会があるからさ、大仙に帰りたいんだ。今晚一晚、

お母さん任せたいんだけど、いいかな。今回いつまでこっちにいられる？ 明日まで？」

「そうだね」と夏菜子は、月曜までと伝えるべきかどうか逡巡し、曖昧な返事をした。

「誤解があるようだから、今のうちに言っとく。お母さんは、お姉ちゃんを避けてたんじゃない。お母さんの実家、農家だったじゃない。女が勉強しても意味がないってずっと言われて育ったんだって」

「そうなの？ 私には、『おしやれる暇あるだば、勉強しなさい』って、いつも言ってた」

「お母さん、実は勉強したかったんだよ。でも農家の長女で、兄弟多かったし、進学となると男兄弟が優先されて、女は愛嬌が第一って言われて反論できなかつたみたい。ま、秋田あるある、だよ。ね。中学校の時、私が夜中トイレに起きた時にお父さんとお母さんが、お姉ちゃんを大学に行かせるかどうかで喧嘩してたの聞いたやつなんだ。夏菜子には希望通りの道を歩ませたいってお母さん力説してた。お父さんがうちにそんな金はないって却下したら、大学の学費は自分の貯金を切り崩すって言った」

夏菜子には初耳だった。

「知らなかった……早苗は勉強第一とか、何も言われなかったの？」

「だって、わたし、可愛いかったから」早苗は両手を腰に当て、胸をはる。「勉強がひれ伏すくらいに」

「何それ」夏菜子はいよいよ笑ってしまった。「でも否定しないわ」

改めて早苗を見る。二重瞼がくつきりしていて、上唇のラインがちゃんと山型に波打っている。ぽちゃっと丸みを帯びた下唇は、東京でボトックス注射を打つ女性たちからすれば羨望の対象だ。肌になんかシワがあっても色白に変わりはなくキメは整っており、卵形した顎はたるんでいなかった。

「う・そ。わたし勉強大っ嫌いだったし、本読むのも嫌いだった。お姉ちゃんは死んだお父さんに似て、背も高くて、運動もできた。だからさ、A高から現役で早稲田に受かった時、お母さん、本当に嬉しかったんじゃないかな。お姉ちゃんが東京に行つてからも、雑音がお姉ちゃんに入らないように、いつも何か起きたとしても、私に相談？ 違うな、ただぶちまけることで、自分の心の負担を軽くしてたんだと思う」

「そんなこと、考えもしなかった。早苗はホント偉い」

「でしょ！」早苗は立ち上がった。「とりあえず、私行くわ。明日また来る」

ほどなく門の外でエンジン音がした。家の中が静かになった。

お腹が空いてきた。思えば朝ごはんは、東京ばな奈とお茶だけだった。昼ごはんを作ろうと夏菜子は台所に行き、冷蔵庫を開けた。豆腐のような容器入りのじゅんさいが五つ。梅干し、卵、納豆、

ミヨウガのパック、漬物の入ったタッパーケース三つ。あとはスカスカだった。

ガセリ菌ヨーグルトに低脂肪のギリシャヨーグルト、賞味期限切れの大福、食べかけのツナ缶、チーズ、豆腐が所狭しと置かれ、肉やソーセージがチルドにぎっしり詰まって、野菜室までばんぱんの夏菜子の4ドア冷蔵庫に比べると、子どものおもちやみた이었다。でも自分達はこの冷蔵庫に育てられたのだ。製氷室と冷凍室が一緒になったスペースが上部にあって、それ以外を下に入れる2ドアの冷蔵庫。昔はこれがばんぱんだった。

コンロの下の開き戸を開ける。あつた。稲庭うどんの乾麺。東京の自宅でも、乾麺をネットで取り寄せており、時々梅干しと大葉をあしらひ冷やし稲庭うどんを作っていた。東京バージョンに違いがあるとすれば、秋田のように、じゅんさいを入れられないことだった。

「お母さん、お昼、稲庭うどんでいいかな？」

夏菜子は声を大にして叫んだ。

母はロッキングチェアから立ち上がり、スタスタと台所にやってきた。

「いいわねえ、稲庭うどん。冷やしにしよう」

そう言いながら、麺を茹でる鍋を流しの下から取り出して、水を入れてコンロにかけた。母は冷蔵庫から出した梅干しを、種をとってすり鉢に入れてゴリゴリとすってペースト状にし始めた。手

際がいい。

「夏菜子は、ミヨウガを切つて。あと、じゅんさいは軽く湯通ししてから、冷やしてね」

網にとったじゅんさいに、やかんで沸かしたお湯をかけようとしたら「違う違う」と止められた。「こつちの鍋にお湯を沸かして。そしてじゅんさいを入れて三十秒だけ熱湯に通す。網でお湯をきつたら、氷水を入れたボウルに入れて、締めてね」

「え、お母さん、こつちの鍋でうどん茹でてるじゃない。そこに時間差で最後の方にじゅんさい入れて、三十秒一緒に茹でて、流水で締める、じゃダメなの？ その方が手間かからなくていいと思うんだけど」

夏菜子は半ば呆れ顔で申し出た。

「あのね、その時間をケチっちゃいけないの。うどんは流しからの水で冷やすくらいでいいけど、じゅんさいはね、特に秋田のじゅんさいは、生まれも育ちも純粋な水の中。繊細でピュアなんだから、最後まで特別扱いてあげないと」

母がガーゼをつけたままの顔で、自信たっぷりと言う。朝、玄関でおどおどしながら突っ立っていた人と同一人物とは思えない。夏菜子の記憶の中にしゃんと生きる母悦子に、戻っていた。

ちゃぶ台に母と向かい合って座る。手を合わせて、出来上がった稲庭うどんをいただく。

つるつるした麺に、じゅんさいがぬるりと絡む。梅のペーストと細く切ったミョウガが、市販の麺つゆにいい塩梅の風味をトッピングしてくれる。夏菜子は器に直接口をつけて、じゅるりと飲み込む。

「じゅんさい、久しぶり。このにゆるツとした喉越しがたまらん」

次は三センチほどある大きなじゅんさいを箸で器用に摘む。呑み込まず噛んでみる。コリッ。アリがガラスを壊すような、ちっちゃなちっちゃな音が夏菜子だけに聞こえる。夏が口で弾けた。

「夏菜子はじゅんさい好きだったもんね。今晚、じゅんさい鍋にしようか」

「いいねえ、じゅんさい鍋。もう何十年も食べてないよ」

そして午後、二人はタクシーに乗って秋田市市民市場にきた。冷蔵庫の中にじゅんさいの買い置きが幾つもあるんだから、近所のスーパーで足りない材料を買い揃えたいと言う夏菜子に、母が強く抗議し、いい材料は市民市場でないと、と言い張ったのだ。

市民市場に夏菜子が足を踏み入れたのは、中学生の時間が最後だった。そのころは客がたくさんいたし、テナントもフルに入っていたように記憶している。今は、午後という時間帯もあるのだろうが店は半分くらい閉まっており、客の姿は見えても観光客と思しき人ばかりだった。

勝手知ったように市場の中をどんどん進む母の後を、夏菜子は保護者のようについていく。野菜

がたくさん並ぶ店の前で母は立ち止まった。品定めをする母に気づいた店の女性が奥から出てきた。

「あれ、悦子さんでねの。久しぶりだね。どうした、その顔の傷。パンダみだいだ」

顔見知りなのだろう。気さくに話している。

「ああ、さっと家の近ぐで転んでね。大丈夫、大したごどね」母は顔のガーゼに手を当てて恥じらいながらも、ちゃんと対応している。

「娘東京がら来だから、じゅんさい鍋するべで思つてね。絹ちゃん、特選じゅんさいど、舞茸ど、セリど牛蒡ごぼういだだぐべがな」

「オツケー。さっと待つてね」

絹ちゃんと呼ばれた女性は店先に並ぶ野菜を物色しては、良さそうなものを選んでカゴに入れていく。

「そちらは娘さん？ シュツどしてらね。早苗ちゃんでねぐで、長女のえーど、早稲田さストレートで入ったお嬢さん。名前なんだつけ……」

母と同輩くらいだろうか、女性はほぼ銀色になった髪をカラフルなスカーフで覆っていて、手の甲が年の割にツヤツヤしている。

「……じゅんさい好きだから、名前も尊菜じゆんさいにあやかかって、尊子とつけようとしたら、ああ、くさか

んむりの下に専門家の専みたいな字を描く漢字ね、中国から来た漢字の尊は難しいからダメだって姑さんに言われて、じゃあ純粹の純子にしようとしたら、なぜか旦那さんに反対されたんだ。それで、じゅんさいは、秋田の夏の野菜だから、えーと、夏の菜で夏菜子、そう夏菜子さん！」

絹ちゃんは、頭の中に書かれたスクリーンをスクロールして読むように、標準語で、ゆっくりゆっくり楽しそうに話した。

「絹ちゃん、よぐ覚えでらなあ」

母も驚いているが、夏菜子をもっと驚いた。仰天していた。そんな話は聞いたことがなかったから。店先に並ぶじゅんさいの中から絹ちゃんは、じゅんさいの入ったカップを幾つか手に取った。動揺しながら夏菜子は、

「お母さん、冷蔵庫にまだじゅんさいたくさんあったじゃない。あれで鍋、できるよ」

とセコいことを口走ってしまった。だから自分は可愛くないんだと思いつながら。すると母は夏菜子の方を向いて、

「せっかく夏菜子が帰ってきたんだから、いいじゅんさいを買わないと」と言つて、絹ちゃんが持っている特選じゅんさいのシールがついたパッケージを取り上げた。

「あのね、この小さい小さい若い芽が、じゅんさいの中でも高級品なの」そう言つて一センチ程度

の若芽を指差す。「秋田にいるならこれ食べてもらわんと。鍋とは別に、ポン酢でツルツと飲めばわかる」

母は夏菜子に意気揚々と説明する。横から絹ちゃんも、

「若芽の周りには、ふるふるのゼリー質多えがら、お口の中も、肌も、幸せになるのよ」と自分の頬を叩く。

秋田を飛び出してからじゅんさいは、目にするこさえなかつた。久しぶりに再会したのは、不倫相手と祇園祭を観に京都に行った時だったのを、夏菜子はこのタイミングで思い出した。先斗町ちようのカウンター割烹でコースの最初の方にガラスの切子に入って出てきた、じゅんさいとミニトマトと枝豆を三杯酢の煮こごりで和えた、涼しくて、優雅で、喉で愛でる芸術。

「じゅんさいは、あの北大路魯山人がこよなく愛した食材だね。京都の深泥池みぞろがけという天然記念物に指定された池で取れる貴重品で、このぬるぬるしたビラビラが大きいほど高級品なんだよ」

男はねっとりした口調で囁いたのだった。

大きいのが高級品という言葉に騙だまされていた。官能的な存在にされつつあった。男は京都に詳しくても、じゅんさいについては素人だった。ふふん。

「夏菜子が生まれたばかりの時に、手のひらを広げたんだ。そのちっちゃい指が可愛くて、じゅん

さいのこの若芽みたいだったんだよ」

母が目を細めて話し出す。絹ちゃんがうんうん頷うなずいている。

夏菜子の中で何かが弾けた。嗚咽おえつが溢あふれる。長い間行き場所のなかった水分が目からポロポロ流れていく。

「あらー、この子は何泣いてるんだか。鶏肉を買いに行きますよ。比内地鶏がいいかねえ」
母が夏菜子の腰にそつと手をあてた。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

美味しいネタの宝庫、秋田

雛

秋田に初めて足を踏み入れたのは、昨年のこと。観光で市内に一泊だけでしたが、秋田ならではの食材が豊富にあつてご飯が美味しかったこと、女性の肌が目で見てもしっとりしてそうだったことをくつきり覚えていきます。

仕事で企画をすることには慣れていますが、小説を書くとなると難しい。小学生に戻った気分です。一字一字打ち込みました。すると書いているうちに、大学の時に一緒だった秋田出身女子の言葉や自分の経験が手を通じてぽつぽつ表に出てくる。書くことは数人分の人生を追体験することなのでしょう。秋田には、んめあネタがじつぱりある（方言の使い方が間違っていたらご指摘ください。教えを乞いにまた伺います!）。「ふるさと秋田文学賞」で入賞できたこと、大変うれしく、



光栄に思います。選考委員の先生方、関係者の皆さま、拙文を見つけていただきありがとうございます。秋田の皆さま、またどこかで私の小説を見つけたら、手に取ってやってください。踊って喜びます。

第12回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

フラッシュバック

畠山ルミ子・作

フ
ラ
ツ
シ
ユ
バ
ツ
ク

薄暗い廊下を。ペタペタと脇目もふらず、一心に進んでいる。覚つかない足取りではあるが、向かっている先は明確だ。床が足の裏へわずかに吸いつくような感触がある。裸足だ。モップやバケツ、ストレッチャ―が壁際に雑然と置かれている横を通り過ぎる。いつもはかかない匂いで、わずかな不安が刺激されそうになる。日常では、きつとかがない匂い。大人になって気付いたが、それは消毒薬や洗剤、しばらくお風呂に入れずにいるであろう人達の体臭が微妙に入り交じった匂いであった気がする。遠くに見える窓から、夕暮れの光がもれている。日没まであとわずかだ。

毎日通っている廊下でもないのに、自信満々で突き進んでいけるのは、前に一度来たことがあるからだ。一回目の御見舞ですっかり味をしめてしまったのだ。後ろから誰かが追いかけてきてくれる安心感を、背後にしっかりと感じている。半ば小走りになりそうな私へ何か話しかけながら父は追って来る。

突然視界が明るくなり、私は歩を止める。ちょうど一間程の間口に、所狭しと並べられた新聞や雑誌、食品の類をじっと見上げている。売店のおばさんは、かがみこむようにして何か話しかけてくる。二才に満たない珍客が一人で来たことを不思議に思ったのかもしれない。まだ流暢に話せなかった私は、どうやってほしかった物を手に入れたのだろう。追いかけてきた父が差しのべるとんちんかんな品物を目にしながら、ずっと首を横にふっていたのかもしれない。「ちがう、ちがう」

と心の中で思いながら。父は短腹な人だと勝手に思いこんでいたが、そうではなかったことが、この出来事から窺い知れる。

あの時、つるんとした厚いガラスのびんに入っているほんのりピンク色をしたイチゴ牛乳が大好きだった。病院の売店でなければ手に入らない、特別な飲み物であったことも幼心に知っていたのかもしれない。父は私がそれにうなずくまで根気強く付きあってくれていたようだ。幸せな気分が満たされているが突然終わるその光景。父の腕に抱えられた私はどこか誇らし気に大事そうにイチゴ牛乳を手をしている。数年前に私も生まれた能代のしろの病院でのショートムービーのような記憶の始まり。

言葉を習得してもらうことに心を砕く仕事に携わっている末娘は、ある日私に聞いた。

「お母さんは、自分の記憶の始まりのこと、覚えてる」

咄嗟に、いつも思い出すお決まりのその光景について伝えると大事なことを教えてくれた。

「ちょうどその頃、お母さんは何か言葉を獲得したんだよ。記憶の始まりは、言葉を話し始められるようになった頃と、ちょうど重なるんだって。何か、納得するよね」

そうだったのか。

弟が生まれた病院へ仕事を早く上がった父と一緒に、母と弟の御見舞へ出かけたのに、本来の目

的をしつかりと果たせたのだろうか。

甘酸っぱい余韻がいたずらする記憶の始まり。「絶交」不穏な響きのあるこの言葉を初めて聞いたのは、保育園の年中か年長だった頃。私の心を映し出したような曇天と、ホールの喧騒の中、そこだけ時間が止まったみたいに切りぬかれる光景。言葉の意味も知らないのに、良からぬことが起こっているかもしれないという絶望的な観測。何があつたのだろう。ある朝、登園したN子は私に言った。

「今日からY子と絶交する」

少し遅れて登園したY子も同じことを言った。

「今日からN子と絶交する」

普段は仲良しの二人が、お互い腕組みをしてそっぽを向き、話もしなくなってしまった。

その時、幼心にはつきりと、絶交という言葉の意味を知った。自分に実害はなかったのかもしれないが、心に与えた影響は大きかったし、友達の絶交は一大事と受け止めていた。

家に帰るなり、お夕飯の準備で忙しそうなお母に流しで伝えた。普段から大らかなお母は、私の話を耳を傾けてくれたが、手は止めなかった。娘が当事者でなかったのなら、さほど気に止めなくてよいと判断したのかもしれない。自分の受け止め方との温度差にもどかしさを感じていた。友達が

知って使っている言葉を自分は初めて聞いた上、意味すら知らないことに、はずかしさみたいな気持ちもあった。一つの言葉を聞いてゆさぶられた、初めての体験。

はずかしさは、私の心に常駐していて、どんなにとつばらおうとしても、姿形を変えながら私の安穩を邪魔している。それは、幼かった頃の大晦日の出来事に端を発している。

その日の夜は、普段より早くお風呂に入ることにした。何度か入浴を促されながらも三回目位にようやく入るのが常だったのだが、早めの入浴を決めた。明治生まれの祖母も、普段から先に入ることなど滅多になかったのだが、大晦日という特別感で普段と違う行動をしようと決めたのかもしれない。

いつもより早めの、少しでも豪華なお夕飯を済ませたうちの居間には、普段と違う空気が流れていた。子ども心に、今日はナマハゲ（自分が生まれ育った地域ではナゴメハギが正式名称らしかった。でも当時、子ども達はみんなナマハゲと言っていた）が来るかもしれないという噂をどこからともなく聞いていた。普段、家でお酒を飲む習慣のない父や母は、ナマハゲに対する失礼がないようにと、もくもくとお迎える準備をしている。御神酒おみきや御膳が整えられつつあった。子ども達には、ばれないようにと秘密裏に進めていたつもりのようなのだが、勘のよかった私は即座にいつもと違うぴんとした空気を感じることができた。きつと、もう少ししたら家にも来るんだ。会わずに済

めばラッキーかも……。そんな軽々しい気持ちにずるさもあいまって風呂に入ることにした。でも今なら、自分のことがはずかしくなるからやめなと言いたい。

風呂の戸を開け、祖母と一緒に入る。さすがにナマハゲも、風呂場までは捜しに来ないだろう。しばらくの間、安住の場となるはずだった風呂のふたをとる。湯気が立っている。先が四角くなっている水色の棒でかき回し、おそるおそる足を入れる。

ちょうどその時、廊下の向こうに恐ろしい怒号が聞こえた。ついに来てしまったと思う間もなく、自分の身に起きているいつもと違う異変に気がつく。湯は冷たく脚に刺さりそう。生まれて初めて心ならずも入ってしまった水風呂が、こんなにも冷たかったなんて。沸いていたのは上の方だけで、胸から下は正真正銘の水だった。普段は心地よいはずの風呂は、暗転した。冷たさにブルブル震えながら、ここにいたら安心という浅はかな気持ちさがゼロになる。それでもナマハゲには見つかるまいと、風呂の戸をピンと閉めて寒さに堪えた。祖母は私を試していたのかもしれない。

「あがって行ってナマハゲに会うべきだよ」そう伝えたかったに違いないが、何も言わなかった。水風呂は、卑怯な私の背中を押す、格好のきっかけだったはずなのに、結局あがらなかった。そんな私を見て、祖母は半ばあきれていたように思う。はずかしかった。

静かになった居間の気配を確認して、風呂からおそるおそる出てきた私の目にとびこんだのはポ

ツンと座る弟の姿だった。まだ涙でいっぱい目のまま、ポツリと話し出す。

「どうして俺だけ、こんなに怖い思いをしなければならなかったんだろう」

弟の周りには、ナマハゲの勢いそのままに、わらが無造作にちらばっていた。母は言った。

「いやあ、心臓トクトクしてきたっけ」

父と母と弟はちゃんとナマハゲをお迎えした。私はお迎えをしなかった。この事実には、私はしばらく苦しめられることになった。自分勝手に苦しんでいたと言われたら、それまでだ。

それからしばらくの間、一人ナマハゲに堪えた弟に対して、強く出ることができなかった。私は裏切り者の烙印を自分で自分に押し、水風呂を我慢して、風呂に隠れていた自分を悔やんだ。しばらくの間、家族はみんな弟を応援しているような気がした。あの時、水風呂に後押しされた私は、すぐにあがって、意を決してナマハゲの洗礼を受けなければならなかったのだ。そうしていたら、こんなにも長い間心の中にはずかしさを抱えることもなかったんじゃないか。

年を重ね、ナマハゲが訪れた家で、大人に抱かれながら泣きじゃくる子どもをテレビのニュースで見る度に思う。この子は正しい。そして、見ず知らずの子どもでありながら、勝手に健やかな成長を願ったりしている。

「きつと、何か特性もっているよね。俺はそんなにありありと、子どもの頃のこと覚えていたりし

ないもの。世の中の多くの人達も、そんなにたくさん、自分が小さかった時のこととか、覚えていないと思うよ」

事もなげに主人は言う。そこには、自分とは異質なものに対する線引きをしっかりとしている気配がある。そういうものなのだろうか。

小学校の入学式、風が強くて木造の棧のガラス窓はガタガタと音がうるさいくらいだったけど、校長先生のお話は、保育園を卒園したばかりの私にも分かる内容で、まさにストーンと心に入ってきた。人の心の中には悪いことをすると大きくなる黒い玉と、善いことをすると大きくなる白い玉があるから、白い玉が大きくなるように挑戦して、良い子になってほしいという内容だった。子ども心に、白い玉を大きくしていかなくっちゃ、と思っていた記憶があるし、今でもふと白い玉について考える時がある。

「かしこい」という言葉を賢いMちゃんが使って発表した、小学校の国語の時間の教室風景。枚挙に暇がない程、フラッシュバックする出来事の数々。ふとした拍子にどうでもいいことを思い出したりは、ほんのり、けれどもじわじわ心が満たされていくのを感じる。能代の病院の廊下から始まった私の記憶。

エッセイ・紀行文の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

募る思い

畠山 ルミ子

この度はエッセイ・紀行文の部で佳作をいただき、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。ご講評いただいたことを伺いながら、自分の中に前向きな気持ちがありました。「書く」という個人的な作業を、今回のように人様にアウトプットすることは滅多にないのですが、それでもやっぱり著名な先生方からのお言葉を胸に刻みながら、書くことに挑戦したいと思えました。

これまで、失敗や凹むような出来事があっても、引きずらず、一晩寝たら前に進んでいけるようになってきました。でも、原稿を投函してからの毎日は後悔の連続でした。もっと違う表現ができたかも、あれでは真意は伝わらない、結局何が書きたかったのか。何度も思考が堂々巡りし、決まって気分が塞ぎこみました。自分の原稿を応募することに、どれだけ多



くの責任がついてまわるのか、その頃は、しつかりと気付いていなかったのかもしれない。もつと腹を決めて書かなくてはならないとの思いに至りました。

原稿を書くにあたり、これまで面と向かって感謝の気持ちを伝えることなどなかった両親に、ほんの少しでも「ありがとう」の気持ちが伝わればという思いをこめました。気恥ずかしいので、文中のどこにもそういった表現はありません。でも、自分はこんな幼少期を過ごし、大人になった今でも鮮明に覚えているほど満ち足りた心でいられたこと、そんな環境を作ってくれていた両親に、ありがたい気持ちでいっぱいであることを伝えたかったです。

表彰式当日、小説の部で受賞された皆様とわずかな時間、お話ができました。書くことを生業とされている方もおられ、自分との違いに恐れ入りました。もつと原稿に責任をもち、胸を張って提出できる作品をいつか完成させられたら……思いは募ります。

選
評



構成に工夫された作品が多かった

塩野米松

『小説の部』

ふるさと秋田文学賞は『へなが』（高山進）。コロナ禍で帰郷できずにいた亜紀に祖母の鈴が亡くなったという知らせが。亜紀は同棲中の隆志と一緒に行ってくれと頼むが、断られる。一歳年下でプロのゲーマーを名乗るプータローだ。秋田に帰って、祖母の通夜で事件が。幼なじみの凛太のおじいちゃん幸蔵が怒鳴り込んできたのだ。死んだ鈴婆ちゃんに想いを寄せていたという事情が明かされる。鈴は若くして夫を亡くし、赤ん坊だった亜紀の母を連れて故郷に戻ってきたのだ。その世話をし、さまざま融通してくれたのが幸蔵だった。やがて別の人と結婚するのだが、鈴への想いやまず、火葬場でわめき散らす。そして亜紀に「東京へ行って帰ってこない薄情者」と絡む。その背景に孫凛太に縁を切られた事件が。おばあちゃんの葬儀で悲しむ亜紀にひっきりなしに隆志からラインが入る。「トイレットペーパーないんだけど」「ゴミ袋どこ」。無機質な通知音が都会的な人間

関係と人情濃い田舎の溝に響く。田舎と都会という古い対比が気になるが、多分今も現状。スマホの通知音や複層した構図、人物配置、よく組み立ててある。タイトルの「へなが」は秋田弁で背中のこと。婆ちゃんの残した「へながまがつてもそばさいでける人といっしょになれ」から。せっかくの傑作にこのタイトルはもったいない。亜紀は葬儀の途中でスマホの電源を切る。隆志から山ほどのメッセージが入っていたが、開けずにそのままに。亜紀は決心したのだ。とても上手に書かれている。うまい。

佳作の『流木と悪魔』（位ノ花薫）も仕掛けの工夫された作品だ。舞台は男鹿半島の脇本海岸。ここに大きな根っこ付きの流木がある。よく森の原木が知恵者として登場するが、その海岸版かな。この流木に腰掛けて休む鎌田という老人がいる。彼は漂流物を拾い集めてオブジェを作っている。フナムシやイソガニと流木の会話が状況を説明する。近所で強盗がはやっていてという噂が。同じ頃鎌田の孫が久しぶりに帰ってくるという。鎌田の家に使わなくなったテレフォンカードの買い取りに来た若者がいた。突然、生臭い押し込み強盗事件の話に。良く考えてある。脇本の黒曜石に目を付けたところもよかった。ただ、地名には霊力があることを忘れてはならない。地名には歴史や文化や風土が埋まっている。西風が吹雪く冬の日本海、生息する生き物たちにも注意が要る。小さ

な綻びが、せつかくの仕掛けを邪魔することも。

同じく佳作に『ピュア』（雛）。登場人物は東京に住み、広告代理店に勤める五十歳独身の姉。三歳下で秋田に住む三児の母の妹。暫く連絡が途絶えていた妹から突然ラインが。「一人で暮らす母が徘徊するようになり、倒れて流血、今病院にいる。話したいから秋田に来てくれないか」と。心配していたことが起きたのだ。最終の新幹線で実家へ。さまざまタバタがあり、妹と母親に会う。妹は大仙市に住み、ときどき秋田市の母を訪ねていた。昨年あたりから「まだら認知症」だと。成績のいい姉、美人の妹。二人にはわだかまりがあった。母は妹ばかりかわいがっていると思いでいた姉。しかし、実家には姉の部屋がそのまま残されていた。ときどき正気に戻る母親を入れてのおしゃべりの中で、姉は母の本心を知る。二人で買い物に行き懐かしいジュンサイ鍋を。姉の心が解けていく。秋田にたどり着くまでの冗漫な前置きを処理すれば、テーマのしつかりしたい小説になる。車内販売や、魯山人の話など「余分な解説」は入れぬ方がいい。三人の会話などとても上手である。

ところで、この三作、揃いも揃ってタイトルがへたくそ。図書館で、手を伸ばすのはタイトルが呼ぶから。とても大事なものを疎かにしているのが残念。すぐく損をしていることに気づきなさい。『ひと夏の宴』は良く書けているが、都合良すぎ。『白神の空を抜け』は、はつきり言って何が書

かかれているかわからない。でも、描写には美しいところがあり、異能を感じる。次作を読みたい。

『エッセイ・紀行文の部』

ふるさと秋田文学賞はなし。佳作一点のみ。八十七作の応募がありながらこの結果は残念。佳作の『フラッシュバック』（畠山ルミ子）は、二歳の時病院の売店で手にしたイチゴ牛乳、幼稚園で友人が言われた「絶交」という言葉、ナマハゲから逃げて隠れていた想い出や入学式の校長先生の言葉。ふとしたときに思い出すことを「フラッシュバック」というタイトルでまとめてあるが、無理がある。一個ずつのテーマでそれぞれ一本作れるのでは。エピソードを押し込み過ぎ。心に残った一つのシーンやテーマで仕上げる訓練をすすめる。これは他の多くにも言えること。タイトルを含め、ていねいに言葉を選んで作り上げると、心に響くエッセイができる。渾身の作品を待っています。

〈作家 せんぼく 仙北市（旧角館町）出身〉



ふるさとの描写にリアリティーあるか

橋本 五郎

ふるさと秋田文学賞の応募作品を審査するにあたって、私にとっては「ふるさと」が良く描かれているか、そこに共感を覚えるかが大事な基準になります。その際ポイントになるひとつが方言の効果的な使い方にあります。小説の部で大賞を受賞された高山准さんの「へなが」について、最終選考委員の塩野米松さんは「タイトルが良くない」とのご意見でした。秋田以外の人にはわからないという理由です。私もそうは思いますが、むしろ、わからないだけに「どういう意味だろう」と思っ読んでみようという気になるという意味で有効かなとも思うのです。

この小説は、おばあさんの死から「へながまがってもそばさいでける人といっしょになれ」というおばあさんの教えが思い出されます。同棲相手はそれにふさわしいかという疑問がさらに募り、別れる決断をします。その気持ち、よくわかります。地域の人たちがみんなで見送るといふ通夜の状況がよく描かれ、故郷を出ることは「薄情者」になってしまうという息苦しさも多くの人が実感

することでしょう。ただ、おばあさんの言葉はまさに真理と思いつつ、選んだ相手が「へながまがつてもそばにいでける人」かどうかは、棺を覆うてもわからないものかもしれないとも思うのです。

佳作の「流木と悪魔」は、タイトルが良くありません。私なら「流木は知っていた」という題名にします。でも、さすが応募すること4回目の作者は「手練れ」です。まず「小道具」の多さに目を見張ります。舟唄、磯ガニ、強盗事件、黒曜石、流木が好きな宗助……。そして「しみじみおもう、しみじみと。おもいでだけでいきでゆく」という歌がうまい具合に挿入されています。

「やめなよ、心があるかもしれないよ」。樹形巨人狩りに参加していなかった少年の言葉がいいですねえ。「じいちゃんが言ってたよ。長いあいだ大切にされてきたものには命が宿るんだって。その木、しみじみじいさんが大切そうに撫でてるもん。心が宿ってるかもしれないよ」。そうなんです。存在するものには意味があるんです。

もうひとつの佳作、「ピュア」について私は高得点をつけたんです。というのも、展開がスムーズでいちいちうなずけるからなんです。第一に、ふるさとを離れて親を妹にまかせているという罪の意識を引きずっている。次に、親は長女の部屋は残し、次女はそばにいて自分を気にかけてくれるのに、それほど大事にされていない。離れているほど心配になるからでしょうが、割に合わないと思っている人も多いでしょう。

田舎の因習に縛られた恨み。とくに女の人には強いものがあるのかもしれませんが。「お母さん、実は勉強したかったんだよ」。この言葉には限りない実感が込められています。恨みは深いのです。ふるさとへの限りない愛着と抜け出したいというアンビヴァレント（二律背反的）な気持ちが見えなにあるのです。

エッセイ・紀行文の部の佳作「フラッシュバック」の校長先生の言葉はいいですねえ。「人の心の中には悪いことをすると大きくなる黒い玉と、善いことをすると大きくなる白い玉があるから、白い玉が大きくなるように挑戦して、良い子になってほしい」。そして、「かしこい」という言葉を賢いMちゃんが使って発表した国語の時間の教室風景など、フラッシュバックする出来事の数々。ふとした拍子にどうでもいいことを思い出してはほんのり、けれどもじわじわ心が満たされるとあります。確かに、どうでもいいことかもしれませんが、過去を思うとはそういうことですね。

今回、エッセイ・紀行文の部に大賞はありませんでした。全体として水準も高くないと思いましたが、なぜか。単なる報告だからです。応募するから書くのではなく、どうしても書きたいという衝動がなければならぬのです。心に残るものがひとつあれば十分エッセイは成り立ちます。内部から沸き上がるものがほしいのです。

〈読売新聞特別編集委員 三種町（旧琴ヶ丘町）出身〉

一次選考委員 寄稿

確かな近道

柴山芳隆

「ふるさと秋田文学賞」が一二回目を迎え、応募が複数回になる作者も増えつつあるようだ。一回、三回と応募が重なると、作者の筆力も向上して作品としての完成度が高まり、読者にとっては読みごたえのある作品が多くなることにつながるから、それはそれで喜ばしいことである。

ただ、ここで忘れてならないのは、執筆作品の増加は表現技術の上達などに通じること間違いなもの、表現内容の充実には必ずしも直結していないということである。

よく言われるように、書くという行為は自分を消費するということに他ならない。書けば書くほど人は痩せていくのが通例で、エネルギーを何も補うことのないまま書き続けていくと急速にやせ細り、他人の文章を引用したりといった手段を用いないかぎり、程もなく何も書けなくなってしまう。

そうした事態を避けるためには、日常不断にエネルギーを補充し続ける努力が必要になってくる

が、その一番よい方法は読書であろう。

読書と言われても何をどう読んだらよいのか分からないといった声も耳にするが、小説であれエッセイであれ、文学性の高い作品をものすために不可欠な栄養分を摂ろうと思つたら、ジャンルを問わずとにかくたくさん読書をする夢中になつて読むことがまず肝要である。一言で言え濫読^{らんてく}である。

濫読しているうちに次第に自分の興味・関心・性向等に合つた分野の著作が見えてくるのが普通だから、その段階に達したら今度は自分の好きな世界の書物を集中的にまた体系的に読み進めていくようにするのがよいかと思う。ただし、ここでも、自分の苦手な分野には一切手を出さないというのはやはり問題で、苦手であろうと嫌いであろうと、古今東西を通じて名著、名作と評価されている作品については一応目を通すように心がけるべきであろう。

読書では読む量も大事だが、読み方の質も課題になつてくる。いくら大量に読んだとしてもそれが自分のなかでほとんど結実しないのであれば、あまり読んだ意味がないという結果になる。自分の血となり肉となる読み方が求められるのである。

そのような読み方をするにはどうしたらよいか。その基本的な方法の一つが読書ノート作りとその活用であろう。このような「ノート」は市販のものもあり、それを利用するのも一つの方法だが、

できれば自身による手作りの方が望ましいように思われる。自分にとって使い勝手がよい形式にして、それを自分なりに使いこなしていくと、読書ノートを利用する効果もさらに上がっていくのではなからうか。

日記と同じで、読書ノートは公開を前提としていない。どのような形式でも、どのような使い方でも、誰からもどこからも文句や苦情はこない。そもそも、読書ノートみたいなものなど作らなくてもなんら非難される筋合いはない。しかし、それでもやはり「ノート」には大きな意義があると考えられる。

「ふるさと秋田文学賞」への応募作品を読んでいると、総じて、基本的に読書量が不足していると
の感否めない。読書することで培われているはずの表現力が必ずしも十全とは感じられないのである。応募作を前にして、言葉の高い山々に身が竦すくむとか、流麗な文章の渦に飲み込まれてしまっ
たといった経験がこれまではほとんどなかった。

「人はパンのみにて生きるにあらず」というのは聖書に出てくるもつとも有名な箴言しんげんのひとつである。パンさえ食べていけば動物的には生きられるが、それだけでは人間として生きられないという意味合いである。文芸作品というのは、本質的には人間を描くことを目的にしているが、書き手が
しっかりした人間でなければ優れた文学作品が生まれてこないのは論を俟またない。

「文は人なり」は人口に膾炙かいしやしている。よい人が書いた文章はよい文章になるし、よくない人が書いた文章はよくない文章になるのが一般である。それに倣ならって誤解を懼おそれずに言えば、よい文学作品を産み出すためにはよい人間になることがまず必要で、よい人間になるためのもっとも確かな近道は読書だと考えている。

〈作家 秋田市在住〉

「ふるさと秋田文学賞」選考委員の内館牧子様が令和七年十二月十七日に御逝去されました。事業が創設された平成二十六年年度から最終選考委員をお務めいただき、厳しくも温かいまなざしで示唆とユーモアに富んだ多くの御助言を賜りました。

内館様の御指導に深く感謝申し上げますとともに、謹んで哀悼の意を表します。

秋田県の読書活動推進施策

～県民運動の視点で読書活動を推進～

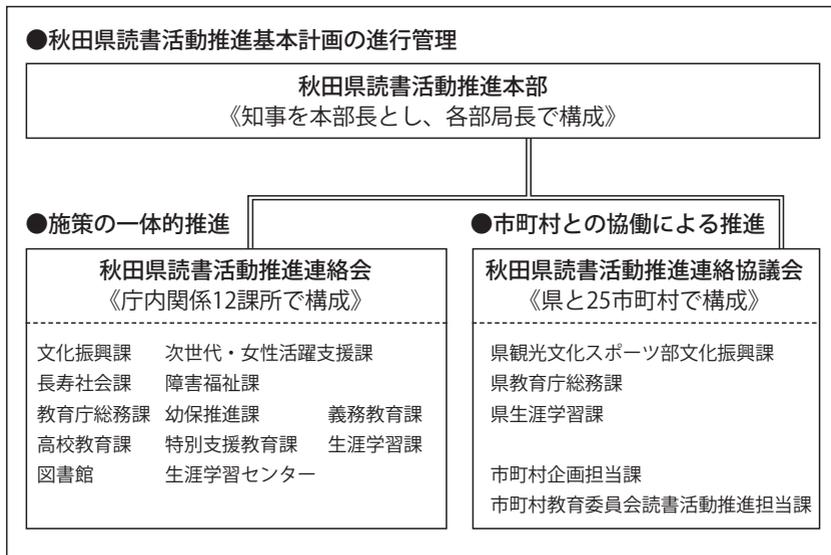
秋田県では、全国に先駆けて読書条例〔秋田県民の読書活動の推進に関する条例〕を制定し（平成22年4月1日施行）、毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

また、条例に基づき、「秋田県読書活動推進基本計画」を策定し、読書活動の推進に関する施策を総合的・計画的に進めています。



©2015秋田県んだッチ

《読書活動推進体制》



《令和7年度 県の読書活動推進の取組例》

○読書啓発イベントの開催

「県民読書の日」にちなみ、11月2日（日）にANAクラウンプラザホテル秋田（秋田市）で開催したイベントには、約400名の方々に参加いただきました。

ステージイベントの第1部「第12回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、受賞者4名の表彰に続き、選考委員の塩野米松さん、橋本五郎さんによる講評をお聞きいただきました。

第2部「読書の杜トークライブ」では、脚本家・映画監督の北川悦吏子さんと、秋田市出身でフリーアナウンサーの堀井美香さんが、読書との向き合い方やお薦めの本などについて軽妙なトークを繰り広げました。

このほか、会場には「本の交換会」コーナーなども設置し、多くの人に読書一色の空間をお楽しみいただきました。

参加者からは、

- ・読書を盛り上げる様々な企画があり、興味を持ちました。
- ・数年前まで読書好きだったのに今全く読んでいない。このイベントで読みたい書きたい欲がまた出てきました。
- ・選考委員の厳しくもあたたかい言葉に、秋田、文学、人、ことば、様々なことに対する熱い愛を感じました。

などの感想が寄せられました。



○読んだッチ・リレー文庫

子供たちの読書環境を充実させるため、家庭で読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、希望する保育所等に贈って子供たちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23年度から令和6年度までの14年間で1,353名の方々から寄贈があり、1,028か所の施設に届けられ、子供たちに読書の楽しさが繋がれています。

保育所、幼稚園、こども園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗など、子供たちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。

設置のお申込みは、随時受付していますので、是非御利用ください。



読んだッチ・リレー文庫(例)

○「あきたブックネット」による情報発信



特設ページ「あきたブックネット」

県公式サイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」では、著名人がお薦めする本の紹介や県の取組など、読書を身近に感じられるような情報を発信しています。

また、X（旧 Twitter）では、読書に関する県内外の新しい情報を紹介しているほか、YouTube では、ふるさと秋田文学賞受賞作品の朗読などを公開していますので、是非御覧ください。

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」(「美の国あきたネット」内)

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>

過去の「ふるさと秋田文学賞」受賞作品もこちらから



作品募集要項・実施状況



第12回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

秋田県を舞台とした作品、又は秋田県の実然・歴史・風土・文化・人物・物産などを題材にした作品を募集します。

●部門 【小説の部】【エッセイ・紀行文の部】

●応募規定 【小説の部】

A4判の400字詰め原稿用紙換算
(空白文字数を含む)で50枚以内

【エッセイ・紀行文の部】

A4判の400字詰め原稿用紙換算
(空白文字数を含む)で10枚以内

- 原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。
- ワープロソフトなどで作成する場合は、横長A4判の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記してください。
- 原稿用紙換算には、手書き原稿及びワープロソフトなどによる原稿のいずれも、空白文字数及び空白行を含みます。手書き原稿は使用枚数を、ワープロソフトなどによる原稿は1,200字1ページ(30字×40行)を原稿用紙3枚と換算してください。
- 応募作品には、裏面の事項を明記した表紙を付けてください。
- 【小説の部】は、200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次ページに添付してください。ただし、「あらすじ」は、枚数には含まれません。
- 原稿は、2部お送りください。(コピー可。必ず通しページ番号を付け、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップなどでとじてください。)

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●応募締切

令和7年7月18日(金)

※郵送(当日消印有効)又は持参(平日午前9時～午後5時)してください。

●選考委員

一次選考委員

柴山 芳隆氏 [作家 秋田市在住]

最終選考委員 (五十音順)

内館 牧子氏 [脚本家、秋田市出身]

塩野 米松氏 [作家、仙北市(旧角館町)出身]

橋本 五郎氏 [読売新聞特別編集委員、三種町(旧琴丘町)出身]

●注意事項

- ・日本語で書かれた自作未発表のものとしします。
- ・表紙及びワープロソフトなどによる原稿の様式は、県公式サイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
- ・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめ御了承ください。
- ・各部門への応募は、一人1編に限ります。
- ・他の文学賞やコンクールに同時期に応募している作品の応募は、不可とします。
- ・応募作品を生成AIで作成することは、不可とします。
- ・盗作など当該作品のオリジナリティが認められないと判断した場合は、受賞後であっても賞を取り消します。
- ・作品の審査及び選考についての問合せには応じません。
- ・表紙に記入された個人情報、ふるさと秋田文学賞に関する連絡・発表以外には、使用しません。
- ・最終選考結果発表時には、受賞者及び最終選考候補作品の作者の氏名(又はペンネーム)、住所(都道府県・市町村名まで)を公表します。なお、作品の応募をもって承諾を得たものとします。
- ・受賞作品の著作権は主催者に帰属します。ただし、主催者は著作本人の意向を尊重し、作品を広く活用できるよう配慮するものとします。

●賞 【小説の部】

ふるさと秋田文学賞 1編(賞状・賞金50万円)

ふるさと秋田文学賞佳作 1編(賞状・賞金 5万円)

【エッセイ・紀行文の部】

ふるさと秋田文学賞 1編(賞状・賞金20万円)

ふるさと秋田文学賞佳作 1編(賞状・賞金 2万円)

※受賞者には、受賞作品集を贈呈します。

●発表

令和7年10月中旬、受賞者に直接通知するとともに県公式サイトで発表します。

表彰式は、令和7年10月下旬～11月上旬に開催予定の読書活動啓発イベント(秋田市開催)で行います。

●応募・問合せ先

秋田県観光文化スポーツ部 文化振興課

読書活動・文化芸術推進チーム

「ふるさと秋田文学賞」担当

〒010-8572 秋田市山王三丁目1番1号

電話 018-860-1530

第12回ふるさと秋田文学賞の実施状況

1 応募状況等

応募総数187

[内訳]小説の部100、エッセイ・紀行文の部87

(県内53、県外134)

2 最終選考候補作品 ※応募順

○小説の部(5作品)

「流木と悪魔」

位ノ花 薫 (栃木県宇都宮市)

「へなが」

高山 准 (秋田県秋田市)

「白神の空を抜け」

山本 郁人 (東京都墨田区)

「ピュア」

雛 (神奈川県藤沢市)

「ひと夏の宴」

花篝 霧子 (三重県津市)

○エッセイ・紀行文の部(3作品)

「ねまれ——方言がくれた救い」

雫石 つみき (兵庫県尼崎市)

「我が心の浮嶋さん」

MeeeeeeN (秋田県秋田市)

「フラッシュバック」

畠山 ルミ子 (秋田県秋田市)

3 受賞作品

○小説の部

<ふるさと秋田文学賞>

「へなが」

高山 准 (秋田県秋田市)

<ふるさと秋田文学賞佳作>

「流木と悪魔」

位ノ花 薫 (栃木県宇都宮市)

「ピュア」

雛 (神奈川県藤沢市)

○エッセイ・紀行文の部

<ふるさと秋田文学賞>

該当なし

<ふるさと秋田文学賞佳作>

「フラッシュバック」

畠山 ルミ子 (秋田県秋田市)

第12回ふるさと秋田文学賞応募募者内訳一覧

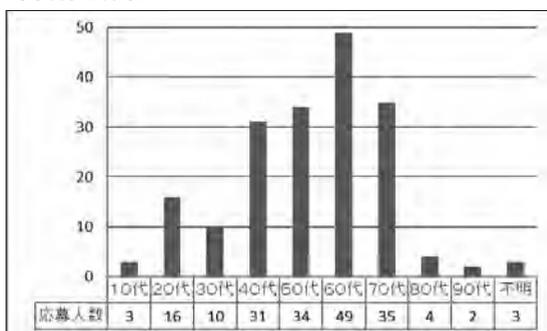
部門別応募数 (編)

小説	100
エッセイ・紀行文	87
計	187

男女別応募者数 (人)

男	119
女	54
記載なし	14
計	187

年代別応募者数 (人)



都道府県別応募数 (人)

都道府県	内	外	計
秋田県	53	0	53
北海道	7	0	7
青森県	1	0	1
岩手県	5	0	5
宮城県	5	0	5
山形県	2	0	2
福島県	1	0	1
茨城県	3	0	3
栃木県	1	0	1
群馬県	0	0	0
埼玉県	8	0	8
千葉県	15	0	15
東京都	28	0	28
神奈川県	17	0	17
新潟県	0	0	0
富山県	0	0	0
石川県	0	0	0
福井県	2	0	2
山梨県	1	0	1
長野県	1	0	1
岐阜県	3	0	3
静岡県	2	0	2
愛知県	5	0	5
三重県	1	0	1
滋賀県	2	0	2
京都府	5	0	5
大阪府	7	0	7
兵庫県	3	0	3
奈良県	1	0	1
和歌山県	0	0	0
鳥取県	1	0	1
島根県	0	0	0
岡山県	2	0	2
広島県	1	0	1
山口県	0	0	0
徳島県	0	0	0
香川県	1	0	1
愛媛県	1	0	1
高知県	0	0	0
福岡県	0	0	0
佐賀県	0	0	0
長崎県	1	0	1
熊本県	0	0	0
大分県	0	0	0
宮崎県	0	0	0
鹿児島県	1	0	1
沖縄県	0	0	0
合計			187

第12回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 令和八年二月十三日

発行 秋田県

編集 秋田県観光文化スポーツ部文化振興課

電話 〇一八（八六〇）一五三〇

表紙

秋田県南秋田郡大潟村 桜・菜の花ロード



秋
田
県